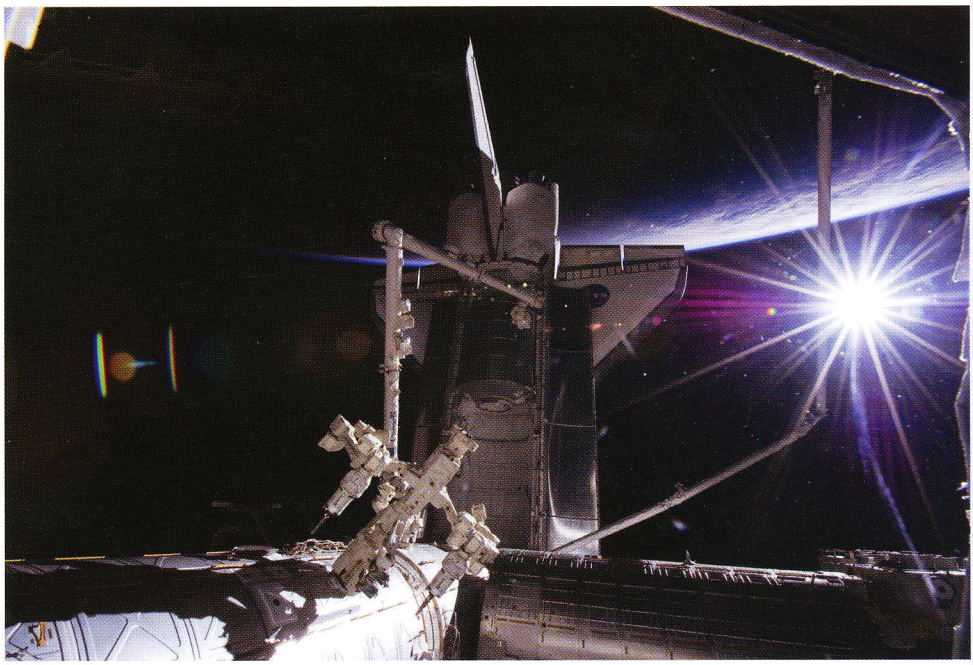
応用心理学のクロスロード



©NASA

Vol. 03

2011. June

◉特集

対談　宇宙飛行士と応用心理学

JAAP 日本応用心理学会

巻頭言

基礎心理学と応用心理学の協働
—心理学教育の新スタンダード構築に向けて—

2009年の日本応用心理学会（九州大学）の大会シンポジウムで、『心理支援論：心理学教育の新スタンダード～コミュニティ資源を活用した体験活動および循環型教育システムの導入と評価～』と題して2008年度文部科学省教育GPの活動報告をさせていただいた取り組みが、今年の1月に1つの形になった。『心理支援論：心理学教育の新スタンダード構築をめざして』と題する単行本が風間書房から刊行されたのである。

もともと、この取り組みは、「あなたは心理学部で何を学んできましたか？」と就職面接時に面接官から尋ねられ答に窮した、という学生の体験談に端を発するといえる。明治学院大学心理学部は、「こころを探り、人を支える」を教育理念として基礎心理学と応用心理学を融合する形で2003年に学部としてのスタートを切ったが、以後、「心理学部で何を学んだか」を明確にしたいという学生の要望に応えるため、教員スタッフの協議を重ね、「心理支援論」の構想に思い至ったのである。

この構想は、心理学部の教育理念とコミュニティの支援ニーズとを統合した新たな心理学教育をめざして，4年間にわたる基幹科目「心理支援論」(必修）の学修により、「心理支援力」を身につけた人材を育成することをカリキュラムの根幹に位置づけたものである。心理支援力とは，支援を求めている人々に共感的に関わって問題解決を図ることのできる力、つまり自己理解力、自己コントロール力、他者理解力、関係形成力、他者支援力などの総合的な力で、その習得には確かな基礎心理学と応用心理学の学修と体験的な学習の蓄積が必須であることをカリキュラムの形で示したことになる。

心理支援力は、ストレスの多い現代社会において，自己の精神的健康を維持し，また周囲の人々を心理的に支援していく“人間力”といえるものであり、複雑化し高度化する社会において今後ますます求められる基本的な力であるととらえた。その育成に当たっては、広く学内外の資源を活用するための「体験活動サポート室」を設置する。そして大学講義の学びを学外での体験活動で実習し、その体験を大学内での学びにつなぐという循環型の教育システムが必須で、それにより学年進行に対応した理論学習と体験学習を統合して、段階を踏みながら包括的に心理支援力を身につけていくことが期待される。

このような経緯で始めた明治学院大学での心理支援論の実践は、一私立大学のささやかな取り組みではあるが、基礎心理学分野の教員と応用心理学分野の教員が協働することにより実現が可能になったという意味で、今後の心理学教育の新スタンダードを構築していく上での1つのヒントを与えるのではないか、あるいは現代社会に立ち現れる問題の解決への寄与をめざす応用心理学の新たな方向性を示唆するものではないかと思慮する次第である。

井上孝代

いのうえ・たかよ◉九州大学大学院修了。現在明治学院大学心理学部教授。博士（教育心理学）。臨床心理士。マクロ・カウンセリング研究会主宰。編著書：『共感性を育てるカウンセリング』、『コンフリクト転換のカウンセリング』、『コミュニテイ支援のカウンセリング』、『つなぎ育てるカウンセリング』『エンパワーメントのカウンセリング』(川島書店)、『カウンセリングの展望』(ブレーン出版)、『あの人と和解する』(集英社新書）等。監訳書：『スクールカウンセリングの新しいパラダイム』(風間書房)、『コミュニティ・カウンセリング』(ブレーン出版）等。

CONTENTS

巻頭言　基礎心理学と応用心理学の協働　井上孝代 …… 1

◆日本応用心理学会第78回大会へのお誘い　3

特集　対談 宇宙飛行士と応用心理学 …… 4

森下高治［日本応用心理学会理事長 帝塚山大学／同大学院産業心理臨床領域教授］× 山崎直子［JAXA 有人宇宙技術部宇宙飛行士 東京大学大学院工学系研究科研究生］

応用心理学 未来への展望

応用心理学が社会に貢献していくために　肥田野 直 …… 10

基礎を据えた研究と実践の積み重ねを大切に　福原眞知子 …… 11

ホープ登場　クロスロードの星

⑨荒木みさこ［桜美林大学］12　⑩寺﨑美穂［大阪府交野市こども室・枚方市福祉部子育て支援室］14

⑪山口　司［北星学園大学］16

■「大会発表賞」の新設と第1回受賞者の紹介 …… 18

■ 2010年度日本応用心理学会学会賞受賞者の紹介　櫻井美由紀・岩崎祥一 …… 19

大学探訪　応用心理学の教育を考える　流通科学大学サービス産業学部　岩崎久志 …… 20

職場探訪　車社会の諸問題に取り組む　財団法人 日本自動車研究所　大谷　亮 …… 23

緊急報告　東日本大震災　岩手からの報告　細江達郎 …… 26

特別寄稿　F・E・フィードラーの履歴、業績および思い出（その1）　白樫三四郎 …… 29

海外最新事情　カリブ海の島国、セントルシア国の育児事情　森　由隆 …… 32

CROSSROAD ESSAY 私と応用心理学 ③　応用心理学者の心理学　大村政男 …… 34

BOOK REVIEW 本を出しました …… 36

大渕憲一『親を殺す「ふつうの子ども」たち』／坂口哲司『新・送迎の言葉』

星薫『教育と心理の巨人たち』／橋本泰子『ありがとう療法　入門編・実践編』

心理学から見たおすすめ DVD 紹介　『精神』　小平朋江 …… 38

応用心理士の現場　ケアマネージャーの独り言　佐伯典彦 …… 39

◆日本応用心理学会認定「応用心理士」資格認定申請のご案内　42

常任理事会通信

◆第79回大会開催校・研究室紹介　43　◆機関誌編集委員会からのお知らせ　44

◆日本応用心理学会入会申込書　45

◆原稿募集　46　◆編集後記　46

日本応用心理学会第78回大会へのお誘い

日本応用心理学会第78回大会委員長　内藤哲雄

「大会へのお誘い」の原稿を執筆しようとしていた3月11日午後2時46分頃、マグニチュード9.0の巨大地震が東北地方太平洋沖で発生し、直後の大津波による被害も加わり、宮城県、岩手県、福島県の東北地方東海岸に未曾有の大災害が生じました。その後の余震も含めて、被害は長野県北部や関東地方にまで及んでいます。さらに福島県では、原子力発電所に二次的事故が発生して、放出される放射線を避けるための避難までが加わっています。3月17日現在でも、東北地方では、1万人を超える人々の行方が不明で、食糧の供給が不十分で、鉄道、道路、水道、電気、灯油・ガソリンなどの燃料、電話などのライフラインの復旧が進まない地域が多く、関東地方では、食品、日用品の不足や計画停電のため生活に支障が生じています。被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

さて、本誌創刊号での「2011年第78回大会開催校・研究室紹介」でもご案内させていただきましたように、第78回大会は、信州大学人文学部（松本市）で開催させていただくことになりました。信州大学での大会開催は、半世紀近く前の1963年に同じく人文学部での、第30回大会（大会委員長中川大倫）以来の2回目となります。開催日程は、例年のごとく第2週の土曜日と翌日の日曜日、本年9月10日（土）～11日（日）となります。大会のテーマは特に設けておりませんが、大会企画のシンポジウムとして、第1に、現代社会の問題となっている若者のいわば新ナルシシズムを取り上げます。オタクの、ないしは超常現象にのめり込む若者、淡々とした恋愛行動に終始する草食型の若者、趣味の世界では熱心に取り組むのに出社できない若者たちは、他者や社会と積極的に関わることなくナルシストとして生きることを選んでいるかのように見えます。新進気鋭の若手研究者を話題提供者とする予定です。第2には、大都市圏を離れた地方における大会開催ということで、車を運転することなく暮らすのは難しい地方における高齢者の交通問題について取り上げます。高齢者は、運転者としてだけでなく、歩行者としても多くの問題を抱えています。交通問題に関しては男性の研究者が多く、これまでの報告は男性の視点によるものが多かったと考えられます。そこで今回は、企画者も話題提供者も指定討論者も、全員女性の研究者ないしは実務者とする予定です。

他方、会員の皆様による自主企画のワークショップについてですが、研究者や実務家の交流の場になればと考えておりますので、多数の申し込みを歓迎します。個人発表では、口頭発表とポスター発表の両方を考えております。大学院生・研究生の若手の皆様には、ワークショップ、参加費等での支援制度がありますので、多数でご参加ください。応用心理士会の研修2件につきましては、例年通り、初日と2日目にそれぞれ開催します。

なお、開催地松本は山岳観光の基地として知られており、人文学部のある松本キャンパスの標高は650mです。大学のすぐ近くに浅間温泉をはじめとする美ヶ原温泉郷があり、ホテルや旅館が数多くあります。市町村合併で、乗鞍岳や上高地も松本市となり、ドラマに登場することの多い山岳救助隊も豊科警察署から松本警察署に移りました。観光名所に恵まれており、日本酒とワインの産地としても知られています。穂高で知られる安曇野市は隣の市で、同じく観光・保養の適地です。ホテル等の予約は早めにすませてください。松本への公共交通機関としては、JR、高速バス、航空機（松本空港）などがあります。高速道路のインターも市街地の近くです。

皆様をお迎えする人文学部の心理学教室と社会心理学教室の学生数は少なく、十分なおもてなしはできないと思いますが、心理学教室の今井　章教授、高瀬弘樹准教授、社会心理学教室の長谷川孝治准教授（事務局長）、清水健司准教授（副事務局長）ともども精一杯務めさせていただきます。皆様多数の参加をお待ちしております。

最後に、大会委員長の私事に関わることを述べさせてください。内藤は、第78回大会を開催した翌月の10月に、東日本大震災、その後の原発事故の当該県である福島県の福島市にある福島学院大学に転出します。信州大学に27年、医療技術短期大学部に6年6ヵ月、人文学部に20年6ヵ月、感慨一入です。

応用心理学 未来への展望

本学会の名誉会員に応用心理学との出会い、応用心理学への期待などについて語っていただきました。

応用心理学が社会に貢献していくために

肥田野 直

ひだの・ただし
1948年、東京大学文学部心理学科卒業。津田塾大学、東京女子大学、東京大学教育学部教育心理学科助教授・教授、大学入試センター研究部長・企画調整官、放送大学教授を歴任。
現在、東京大学および大学入試センター名誉教授。文学博士（東京大学）。日本心理学会、日本教育心理学会、日本応用心理学会、日本健康心理学会、日本行動計量学会その他の学会の名誉会員。

日本応用心理学会との出会い

戦後いち早く復活した日本心理学会と日本応用心理学会の開催する大会は若い心理学者にとって貴重な研究発表の場を提供してくれた。特に本学会の大会は年2回開かれたのでその恩恵は大きかった。

もう1つの思い出は常任運営委員会のことである。当時の運営委員にはベテランの先生方が多く、いろいろ学ばせていただいた。あのサロン的な雰囲気を今でも懐かしく思い出す。

「応用心理学」の役割

大学卒業後の2年間を海軍で過ごし、敗戦後大学院に籍を置いて国立教育研修所でアルバイトをしていた頃、旧制高等・専門学校の入試に進学適正検査（以下進適）が導入された。1947年に実施された第1回の検査の全答案が集められ、その集計と無作為抽出標本の分析を担当させられた。同時に1948年度の問題作成にも参加した。学力試験と進適の2本立ての選抜制度は8年間続いたが、受験者の二重負担や進適の予測的妥当性を裏付ける資料が少なかったなどの理由により進適は廃止された。

1963年、能力開発研究所の検査（能研テスト）が始まった。高校格差の調整に利用する共通尺度の導入により、調査書の重視を促す目的があった。検査には選抜資料となる進適、学力検査のほか、職業適応性検査も実施されたが、私は進適部門の委員として参加した。しかし、能研テストの結果を選抜に利用する大学が少ないため受験者は年々減少し、当時全国に波及した大学紛争の標的にされた影響もあって、1969年廃止に追い込まれた。

なお、この頃、能研テスト、調査書、大学独自の学力試験の予測的妥当性を比較する追跡研究を行う大学が増えつつあり、私も東大における追跡研究に加わった。同様な研究を行う大学が次第に増加し、入試改革の導火線の1つとなった。

一方、国立大学協会は1971年から入試改善調査の検討を始め、遂に大学が主体的に入試改善に取り組むことを全会一致で決議した。その結果、大学入試センターが設置され、1979年から共通学力試験（共通1次）が開始された。当初は5教科7科目の試験で国立・公立全大学が参加したが、1990年から試験科目を各大学が自由に指定できるように改められ、試験の名称も入試センター試験と変更された結果、私立大学の参加も年々増加した。

私は1981年から5年間大学入試センターで研究にあたるとともに企画調整官として所長を補佐した。その任期中は毎日が緊張の連続であったが、センター試験は次第に社会に定着し、現在に至っている。

短命に終わった進適と能研テストを経験した私にとってまさに「三度目の正直」であった。

「応用心理学」が参与する事業が社会に定着するための条件は2つあると思う。①当事者（上記の例では大学）が主体的に意思決定し行動すること。②実施効果を社会的に納得させるための資料を提供すること。この作業に「応用心理学」が果たす役割は大きい。

基礎を据えた研究と実践の積み重ねを大切に

福原眞知子

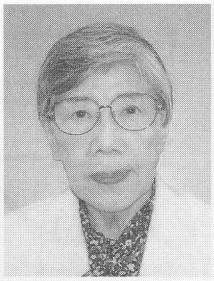
大学卒業後、心理学の道へ

日本の大学を卒業し、心理学への道を志し、米国への留学を計画した私は、拠り所として応用心理学会の事務局（当時は日大）をたずねて学会会員を申請しようとしましたが、大学では心理学を専攻しなかった私に正会員は厳しいようでした。けれど当時の助手の先生のお計らいで、まずのステップを踏むことができました。その後奨学金を得て、米国の小さな大学で心理学を専攻し、さらに大学院でカウンセリング心理学への道を選びました。米国を留学先に選んだのは、当時心理学の応用が進んでいる国と認識したからです。カウンセリングではロジャース・Cの全盛期であり、並行して先行のスーパー・D（職業指導の元祖）の考えやエリス・A（認知行動療法の元祖）らが注目を浴びていました。こうして私は幸いにも「基礎」と「応用」をつないだ果実としてのカウンセリング心理学に自然な形で馴染んだように思います。帰国後私はカウンセリングという新しいジャンルの心理学が日本でも認識されるようにと暗中模索のなか、初期の学生相談研究会（現学生相談学会）や相談学会（現カウンセリング学会）に足を踏み入れ、そこでも多くのお仲間と出会いました。相談学会の前身は応用心理学会相談部会であったとうかがいます。この頃心理学界で「基礎」「応用」ということばが意識されるようになっていたと思います。日本で「応用」のモデルの1つとなった心理カウンセリングもいまや、スクール、組織・産業、医療・福祉、司法への適用が試みられ、また対象となる個人の理解のための心理測定などの発展をもたらしているようです。この傾向は今後も進むものと思います。日本応用心理学会は応用を意識しながら同時に、その基礎的姿勢を堅持している、ユニークな学会であると認識しています。

国際応用心理学会との懸け橋に

私は長年国際応用心理学会（IAAP）に属し、そこで活躍されていた大山正先生のご推薦で理事をつとめさせていただきました。ここではいわゆる応用に限定されるものではなく、基礎的なものから応用的なものまでの研究・実践がはげまされております。日本応用心理学会はIAAPとは直接的にはつながっておりませんが、深い関係を維持しております。1990年には本明寛先生、三隅二不二先生らのご指揮のもと、第22回大会が京都で開催されました。2002年（シンガポール大会）には学会としてシンポジウムに招かれましたが、これは一国の一心理学会がIAAP組織委員会に招かれるという前例をつくりました。この橋わたしをさせていただいたことは私の生涯の思い出です。これらのことを契機に、会員の方々の多数のご参加、特に近年のご活躍は目覚しいものがあるとお見受けします。海外からもさらなる発信が期待されております。

応用心理学は今後も基礎を据えた研究と実践の積み重ねの果実として、ますます複雑化する社会的・文化的ニードに呼応し、多様なヒューマンビーイングに貢献することになるでしょう。またそうでなければならないと考えます。



ふくはら・まちこ
1954年、津田塾大学英文学科卒業後渡米、心理学とカウンセリング心理学を学ぶ（スリングフィールドカレッジ、MEd.）。東京大学教育学博士（1981年）。日本マイクロカウンセリング学会会長；常磐大学大学院客員教授。
主著『来談行動の規定因—カウンセリング心理学的研究』、『マイクロカウンセリング』、『マイクロカウンセリングの理論と実際』（いずれも風間書房）など。主として学生相談や親子相談を行うなか、人格検査（EPPS）や不安テスト（STAI－JYZ）の研究も重ねた。現在は人間への多重文化的アプローチや、マイクロカウンセリングに準拠した心理カウンセリングの統合モデルの追究に関心をもっている。国際応用心理学会前理事。

ホープ クロスロードの登場 星⑨

日本応用心理学会の未来を担う期待の若手ホープを紹介します。

桜美林大学大学院国際学研究科
国際人文社会科学専攻

荒木みさこ

はじめに

私は、今年の4月まで桜美林大学の健康心理学資料室で事務助手をしていました。健康心理学は1980年代に発足した比較的新しい分野です。皆さんもご存知のとおりR・デカルトが心身二原論（物心二元論）を提唱してから、空間に位置を占める物質と、嗜好や意識や魂といった精神・心を分けたことにより、主に物質の科学が進歩しました。精神・心の研究は暫くの間科学の対象ではありませんでしたが、物質と同様にデータを数値化し、現象の理解・予測・制御に関して客観視することができるようになったことから、現在のような科学になったと伺っています。健康とは「健体康心」が語源であり、体が健やかで心が康らかという意味です。健康心理学の大きな特徴としては、体と心を分けることなく心身一元論や心身一如といった観点を重視しており、心と体の両方の側面から捉えることが特徴としてあげられます。

健康心理学専攻の大学院では、主に健康の増進と維持やヘルスシステム・健康政策策定の分析と改善に対して、心理学の分野から教育・研究に取り組んでいます。精神的健康だけでなく、身体的健康も対象とした応用心理学であり、現代社会に生きる人々が抱える心身両面にわたる総合的健康問題を研究しています。社会人の方も多く在籍しており、看護士・教職員・栄養士なども仕事の経験を生かしながら研究をしています。最近の研究の動向ですと身体感覚・動作法・同調・ユーモア・子育て支援・コーチングの研究など、日常生活をよりよく健康に生活するための研究が行われており、健康の維持・促進に対する課題をポジティブな視点と方法で取り組んでおります。大学院修了後は、健康心理士として専門学校講師や公務員・カウンセラーの道へ進む人や、進学する方が増加しています。社会人経験をもつ大学院生は、それまでの専門知識を発展させ、小中学校の教員や病院・社会福祉施設の専任スタッフなどで活躍しています。一般企業に就職される方もいらっしゃいますが、人事や総務関係などで心理学を生かすことができる職場で活躍されている先輩方もいらっしゃいます。

私の研究テーマ

私の研究テーマは、食行動です。生後から現在まで、私たちは食物を摂取して生きていることから、日常の食生活が私たちの心身に何らかの影響を与えているのではないか？　と思い、食行動をテーマに研究を始めました。食行動は、私たちの生命維持に直結する行動であり、心と体のエネルギー源です。「We are what we eat：我々は食べたものそのものである」と言われるように、私達が日常でどのような食べ物を選び、どのような食べ方をしてきたかで、作られる体も心も違ってきます。私たちの健康を維持するために欠かすことができない反面、肥満・異食症・摂食障害といった食障害に至るまでの健康を害する要素ももっています。また、ただ単に栄養素を摂取するだけで

あらき・みさこ◉1985年千葉県生まれ。2008年、桜美林大学文学部卒業。2010年、同大学大学院国際学研究科人間科学専攻修士課程終了。2011年、同大学健康心理学資料室勤務。2011月4月同大学大学院国際学研究科国際人文社会科学専攻博士課程に入学。日常の食行動に興味をもち、食行動と親子関係や心身の関連について研究を行っている。

なく、他者とのコミュニケーションを諮る場を作り、生活習慣を整え、体内時計の調節をし、交感神経と副交感神経の働きを助けていることなど、食行動が影響を与えている内・外的要素は多岐にわたります。なかでも乳幼児の食行動は生涯にわたる生活習慣や食物選択の基礎を作るとともに、親子の大切なコミュニケーションや躾の場であるとされていることから、乳幼児の家庭の食行動に焦点をあてて研究をしています。

これまでの研究は、修士論文の調査研究では、家庭の食育と子どもの自尊感情の関連性の検討を行いました。食育を実施している保護者の子どもは有意に自尊感情が高くなり、食育と自尊感情は2次相関の関連性が見られています。この結果は、食育は実施したからといってすぐに効果が現れるものではなく、曲線を描きながら効果が得られる可能性が示唆されました。

投影法を研究している橋本泰子教授（桜美林大学名誉教授）との共同研究では、投影法を用いて家庭の食育と夕食画の関連性の検討を行いました。食育を実施している保護者の子どもの絵は、家族が多く、食卓では落ち着いてコミュニケーションをとり楽しんでいる様子でした。そうでない子どもの絵は、孤食傾向で、1人ではしゃいでいるようであり、リビングの周囲のことはあまり観察していない様子でした。この夕食画については、性差が偏っていることからデータを増やし、量的な分析もあわせて行っていくつもりです。また、橋本教授が“ありがとう療法”の研究を行っていることから、家庭の食育と保護者が“ありがとう”を言う回数の関連性を見たところ、食育を実施している保護者の方が“ありがとう”と言う回数が有意に多いという結果が得られました。思いもよらず、このような結果が得られたのですが、“ありがとう”という言葉は食物や食品製造の過程で携わる方々への感謝の念に近いのではないかと考察されました。“ありがとう療法”については、まだまだ研究が始まったばかりですので、今後も橋本教授をはじめとする諸先生方と研究をしていきたいと思います。

ところで、筆者が昨年行った幼児の保護者に対するインタビューでは「食育といえるようなものは何も行っていない」と多くの報告がありました。しかし、インタビューを進めていくと何も行っていないはずなのに、ミニトマトを子どもと育てたり、買い物や調理を手伝わせたり、毎日決まった時間に食事をとらせるなど、さまざまな教育や躾がされていることがわかりました。保護者の方々は、雑誌などで見る“スーパーお母さん”に到底かなわないと、食育を行っていないと思っているようでした。また、自分の作った料理をおいしく感じない、子どもに手伝われると困る、といった回答もあり食行動は保護者の負担も多くストレスになっていることも示唆されました。国民生活時間調査報告書によると、幼児の保護者に多い30歳代は家事の行為時間量が5時間を越えており、最も家事行為時間に要する時間が多い年代です。家事のなかでも食に関する家事行為は、買い物・献立・調理・後片付けの多くのプロセスと、1日に3回食事をする頻度の多さから、掃除や洗濯より多くの時間を必要とします。特に幼児の保護者は、子どもの食事の問題だけでなく、同居家族の食嗜好、料理の評価など悩みや関心が高くその分ストレスが生じると思われます。このようなことから、保護者にも子どもにも良い食育・食行動に繋がるよう、保護者の食育の意識・食事に関するストレスに着目して研究を進めていこうと考えています。

これからも日々精励する所存ですので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

荒木みさこ（2010）幼児期の家庭内の食行動と子どもの自尊感情の関連性　桜美林大学大学院国際学研究科人間科学専攻健康心理学専修　修士論文

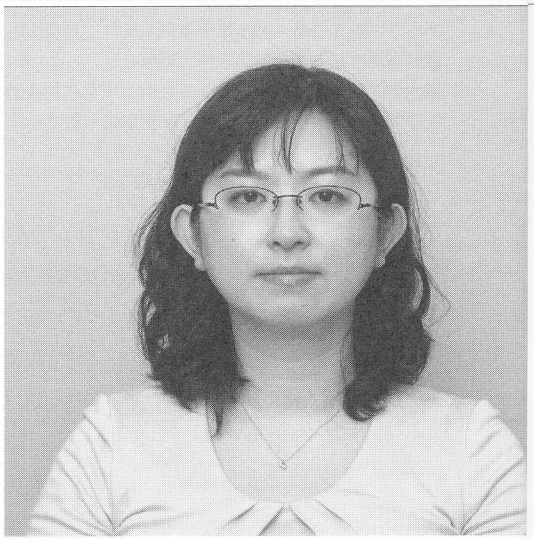
荒木みさこ・山口創（2010）幼児期の家庭内の食行動と子どもの自尊感情の関連性　日本健康心理学会第23回大会論文集，101

橋本泰子・荒木みさこ（2011）食育と子供の食卓画の一考察　桜美林大学臨床心理センター年報（7）25-33

登場

大阪府交野市こども室・
枚方市福祉部子育て支援室巡回相談員

寺﨑美穂



発達臨床との出会い

自治体の乳幼児健診や保育所等の巡回相談で、乳幼児の発達相談に携わるようになって8年になります。「言葉が遅い」「落ち着きがない」「友だちと遊べない」など、お子さんの発達に何らかの心配を抱えている保護者にお会いして、子育てについて一緒に考えさせていただくことが相談員である私の仕事です。

大学では心理学を専攻しましたが、学生の頃は発達臨床の仕事に特別な関心をもっていたわけではありませんでした。ところが、大学院修了後に縁あって、ある市で嘱託の発達相談員として働くことになりました。それが発達相談にかかわった最初の経験です。そこでは乳幼児健診にかかわらせていただきました。当時の私は発達検査の経験は多少あったものの、相談業務の経験はほとんどありませんでした。職場の方には基本的なことから教わりましたが、慣れないことに戸惑う毎日で、仕事のおもしろさを感じる余裕はありませんでした。しかし、日々出会う子どもの姿には不思議な魅力がありました。また、子どもの成長を願うお母さんたちの思いに触れ、それに向き合う他の発達相談員や保健師の姿から学ぶものもありました。そのなかで徐々に、地域に根ざして親子を支えることの社会的意義や責任を感じるようになりました。その後は他の職場に移りましたが、その頃に経験したことは今の自分にも生かされています。

集団のなかでの子ども理解

現在は、大阪府下の2つの市で主に保育所等の巡回相談にかかわっています。巡回相談には明確な定義や実施方法があるわけではなく、各自治体の状況に合わせてさまざまなやり方で行われています。私が働いている市では、心理専門職である巡回相談員が保育所（園）、幼稚園、障害児通園施設を訪問しています（巡回先は市によって異なります）。園では、集団場面の観察と個別の発達検査によって子どもの状態をアセスメントし、保育への助言および保護者の相談に応じます。知的障害や発達障害、肢体不自由の子どもたちや、それ以外にもクラスで「気になる」とされる子どもたちが相談にあがってきます。

具体的な相談の流れは、次のようなものです。園や関係機関から事前に提出された資料で主訴や生育歴などを確認して、園に向かいます。相談当日は保育場面を観察し、保護者、保育者同席のもとで発達検査を行います。保護者との面談後、園の先生方とカンファレンスをもち、子どもへの対応等を話し合って終了となります。

子どもたちが生き生きと過ごす保育現場を訪問することは、それ自体が新鮮で嬉しい体験です。先生の介助の手を、自分でしたいのだと振り払う2歳児の姿に思わず頬が緩んだり、5歳児クラスでは「訪問客」である私にあれこれと園のことを教えてくれる姿に年長さんの誇りを感じたり…何気ない日常の1コマにも、今この瞬間を生きている子どもたちのエネルギーがあふれています。

実際の生活場面を見ることは、子どもの抱える困難を、より具体的に把握することにつながります。保育観察によって改めてその子どもの弱い部分が見えることもあれば、逆に検査だけでは窺え

てらさき・みほ◉京都府出身。1997年、立命館大学文学部哲学科心理学専攻卒業。2000年、立命館大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程前期課程修了。障害者職業センター、児童デイサービスを経て、京都府内の市町村で発達相談員として勤務。現在は大阪府交野市、枚方市で保育所等の巡回相談にかかわっている。臨床発達心理士。

ない発達の芽を感じることもあります。発達検査の情報と生活場面での様子を併せて検討することで、より正確に子どもを捉えることができます。

巡回相談にかかわるようになって、私は発達を社会や集団との関係から捉える視点を、より意識するようになりました。発達は個人の生物学的な要因によって規定されるだけでなく、当然のことながら環境の要因も大きく影響します。子どもの行動は、障害や発達段階から固定的に見るのではなく、友だちや先生の存在がどのような影響を及ぼしているかを捉える必要があります。また、集団からの「問題行動をなくす」といった視点ではなく、子ども自身の主体的な環境（他者やもの、活動）へのかかわりを保障することに問題意識をもつかどうかで支援の方向は変わります。たとえば、障害のある子どもが一見問題なくクラスで過ごしているように見えても、実は他児に手を引かれて参加しているだけで、本人は内容を十分に理解できていないといったことがあります。周囲から目立って「気になる」ことはないとしても、これでは主体的に活動に参加しているとはいえません。

他者との社会的な関係のなかで、自己は形成されます。多様な子どもたちが育ち合う保育現場から学ぶことは多いです。障害のある子ども以外にも、何らかの発達支援を必要とする子どもや家庭環境の問題を抱えた子どももいます。子どもが安心して過ごせる生活空間があり、一緒にいて心地よいと思える友だちとの関係をつくることが発達支援の基本であると感じます。

巡回相談と保育支援

カンファレンスには、できるだけ多くの職員の参加をお願いしています。担任だけでなく他の職員と子どもの姿を共有し園全体で取り組むことが、配慮を要する子どもの保育では特に必要になります。相談員には、保育実践と関連づけた助言が求められます。有用な助言ができずに悩むこともありますが、保育とは別の専門性をもってかかわれることにやりがいも感じます。

相談員の専門性としては、子どもを発達的観点から正確にアセスメントする力量と、保育実践に関する知識、さらに保育者と対等な関係を築くための対人援助の技量が必要であると考えられます。相談員と保育者は、それぞれの専門性をもって保育を考える関係にあります。相談員の助言内容が発達的観点からは正しいものであっても、それが現場に即したものでなければ受け入れてはもらえません。また、保育の悩みを解決できる的確な助言であったとしても、それが保育への“指導”として重視されすぎると保育者の主体性を損なうことになります。

以前は、問題を即解決する保育方法を提示しなくてはいけないと考えていました。最近は、保育者とともに対等な立場で話し合える関係を大切にしたいと考えています。具体的な助言も必要ですが、保育全体を外部の視点から整理し、それを現場に返すことで保育者自身に気付きが生まれます。園側から新たなアイデアが出てくることもあります。そのような保育の主体性を支えることが、巡回相談の役割であると考えています。私自身の発達観や保育観を、相対的に問い直し続けることも求められるように思います。

つながり合うこと

以前、療育機関の指導員の方に言われた言葉があります。「障害のある子どもの親が望むものはいろいろあるけれど、社会のなかで我が子がきちんと受け入れられていると思えることが、一番嬉しいんじゃないか」。子ども同士の関係、子どもと大人、親と保育者、職員同士の関係、地域社会とのつながり…。発達相談の仕事は、子どもを取り巻くさまざまな関係をつなぎ、支えるものです。思えば偶然のようにしてこの仕事に巡り合い、周囲の方々に支えられ、助けられて今の自分があります。主体的に生きるということ、ともに育ち合うことの意味を、自分自身の人生においてもしっかり考えていきたいと思います。

北星学園大学大学院社会福祉学研究科
研究生

山口 司

私と心理学との出会い

私と心理学との出会いは、大学３年の時、図書館で社会心理学の本を手に取ったのが、はじめての出会いでした。そこに書かれている数々の理論が私の身の回りの事柄を説明するのにフィットしており、夢中になって読みました。なかでも、興味をもったのが社会的交換理論でした。「こんな考え方があるんだ！」と衝撃が走り、もっと詳しく研究したいと思い大学院への進学を決めました。そして、大学院で選んだテーマが、恋愛でした。常日頃、将来は漠然と何か人の役に立ちたいと思い大学では臨床心理学を専攻していました。しかし、当時から（そして、今も）、私自身の悩みでもあった恋愛について研究することで、恋愛で悩んでいる人の助けになりたいと思いました。

恋愛研究の意義

一昔前、恋愛の研究をしていると、「恋で起こる不思議な現象は、心の内側にしまっておくべきことだから、研究対象にするべきではない」（松井, 1998 引用）といったような意見に直面したそうです（今もたまにありますが…）。私自身も、心理学を知らない友人などには「恋愛を研究して何の意味があるのか？」ということを聞かれます。その疑問に対して、私が思う恋愛研究の意義として、３つほどあげたいと思います。

１つ目は、『恋愛のメカニズムの究明』についてです。誰もが一度は、恋愛成就に向け、また、恋愛関係を維持することについて考えるのではないでしょうか。そんな時に、恋愛のメカニズムを知ることは有益だろうと思います。

２つ目の『恋愛で生じる問題への解決の手がかり』についてです。主に恋愛関係の崩壊、つまり、失恋についてです。加藤（2009）によると大学生の約８割が失恋経験があるそうです。また、黒川ら（2008）の研究によると失恋によって心の病にかかることもあり、恋愛を研究することは、失恋で悩んでいる人の助けになるのではないでしょうか？

３つ目は、『晩婚・未婚、少子化といった社会的問題への解決の手がかり』についてです。結婚、出産という経路の前段階として、恋愛関係があることに疑いをもつ人はいないでしょう。

結婚や、出産は、つまるところ、恋愛関係を含む男女の関わりに関わる問題です。このように、恋愛について研究することは、心理学的、そして、社会的にも重要な意義があると私は思います。

恋愛から失恋、そして、PDRへ

恋愛研究の意義について、私なりの見解を述べさせていただきましたが、今、私自身どのようなことに関心があるかというと、恋愛というよりは失恋、失恋というよりはPDRです。PDR…、あまり聞き慣れない言葉ですが、Post-dating relationshipの略で、その定義は、「恋愛関係終結後に同一パートナー同士で継続された結婚前の元恋人同士による友人関係」（増田, 2001）とされています。俗に言う、『元カレ／元カノ』との関係です。

『元カレ／元カノ』といった関係についての話は、日常の会話でよく聞くトピックスです。しかし、心理学では、『元カレ／元カノ』という関係について

やまぐち・つかさ◉ 1979年、北海道札幌生まれ。札幌学院大学人文学部人間科学科卒業（2002）、北星学園大学大学院社会福祉学部心理学専攻修士課程修了（2004）、北星学園大学大学院社会福祉学研究科博士課程満期退学（2010）。現在、北星学園大学大学院社会福祉学研究科研究生。現在の関心は、恋愛関係崩壊後の関係。別れたにも関わらず、関わりがある『元カレ／元カノ』とは、どんな関係か、について検討中。

今まであまり検討されてきませんでした。

そこで、『元カレ／元カノ』という関係が研究の俎上に乗るほど、一般的に見られる関係であるのかについて検討したところ、調査協力者の約3割が別れた人との関わりがあり、恋愛的行動（松井，2000；友人や勉強の話から性交までの20項目）の生起頻度では、恋人や異性友人関係との中間に位置するような関係であることを明らかにし、PDRが恋人関係や異性友人関係とは、質的に異なる側面を持ちつつも、一部共通する側面を有する関係であることがわかりました（山口，2011）。

また、別れたカップルが必ずしも、別れた相手と関わりがあるとは限らず、どのような条件がある時、別れた後、別れた相手と関わりがあるのかについて検討しました（山口・今川，2008）。結果は、振った、振られたに関わらず、月に1回以上の頻度で偶然会い、共通の友人がおり、失恋相手を忘れるような努力をしないと、関係解消後、別れた相手と関わりがあることがわりました。

今、現在、わかっていることは、PDRは恋愛関係が崩壊した後、再定義された関係であり、しかも、恋人や異性友人と多くの共通項をもつ関係であるということです。

今後は、PDRが青年にどのような影響を与えているのか引き続き検討したいと思っています。

2つのPDR

最後に、PDR研究の将来的な可能性について、今はまだ、PDRの基礎的なデータ収集、主に、今まで対人関係研究で扱われてきた指標（自己開示、ソーシャル・サポートなど）を用いて、恋愛関係や異性友人関係との比較を通じ、PDRという関係について検討しています。今後はPDRの独自の機能について検討し、それによって、失恋後、PDRとどのように付き合っていけばいいのか悩んでいる人に役立ててもらいたいと思います。

さらに、「熟年離婚」など社会的な問題にもなりつつある離婚についてもPDR研究は、貢献できるのではないかと思っています。厚生労働省大臣官房統計情報部の調査結果（2011）によると、2010年度の離婚数は、25万3000組で、2004年のピーク時（約29万組）から減少してきているものの、依然として離婚率が高いのが現状です。婚姻関係の解消は、経済条件や子どもの有無など恋愛関係とは異なる点もありますが、情緒的な関係の解消といった意味では、多くの類似点があると思います。現に、Hillら（1976）は、結婚前の関係は、結婚関係に特徴づけられる多くの類似した心理的絆を反映しているとし、結婚前の関係の分離過程は、結婚関係における分離の複雑な過程を解決するのに役立つと主張しています。

本来、PDRには、2つの側面があり、私は、現在、Post-dating relationshipを対象としていますが、広義のPDRは、Post-dissolution relationshipの意味があり、そのなかには、Post-divorce relationshipも含まれます。将来的には、Post-divorce relationshipについても研究したいと思っています。その際、どのように調査協力者を募るのかについてが、大きな問題です。PDRに御関心がある先生がいらっしゃいましたら、是非、ご意見、ご感想などいただけたら幸いです。

Hill, C., Rubin, Z. & Peplau, L. A.（1976）Breakups Before Marriage: The End of 103 Affairs Journal of SocialIssues 3247-3268

黒川充勇ら（2008）キャンパスライフにおける対象喪失―失恋の行方を占うもの―　総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集　24, 1-8

増田匡裕（2001a）以前の恋人との友人関係（PDR）と新しい恋愛関係の交渉と葛藤についての探索的研究―対人関係の正当性に関するフォーク・サイコロジー―　日本社会心理学会第42回大会発表論文集　250-251

山口司・今川民雄（2008）恋愛関係崩壊後の関係形成に影響を及ぼす要因について（2）　日本社会心理学会第49回大会論文集　582-583

山口司（2011）恋愛関係崩壊後の関係における交際内容に関する研究―Post-dating relationshipと恋愛関係、異性友人関係との比較―　北星学園大学大学院論集　1447-1460

加藤司（2009）離婚の心理学　ナカニシヤ出版

厚生労働省大臣官房統計情報部（2011）

松井豊（1998）現代のエスプリ　恋愛の心理　至文堂

松井豊（2000）恋愛段階の再検討　日本社会心理学会第41回大会発表論文集　92-93

「大会発表賞」の新設と第1回受賞者の紹介

学会賞選考委員会委員長　藤田主一

日本応用心理学会では、第77回大会（2010年9月11日～12日：京都大学）より「大会発表賞」（以下、発表賞）を新設し、次年度大会以降も継続して実施することを決定しました。発表賞を新設した最大の目的は、本学会の更なる発展と活性化を図るための一助になることです。年次大会で発表された優秀な研究（発表論文）を発掘することを基本的コンセプトにしているため、発表賞の対象は研究発表（ポスター発表または口頭発表）に限り、シンポジウムやワークショップ、講演や研修会などは含みません。発表賞決定に至るまで、第1次審査と第2次審査の手続きがあります。第1次審査は、大会に参加した会員の投票によるものです。審査への参加は会員の自由意志ですが、当日参加の非会員には投票権がありません。第2次審査は第1次審査の結果に基づき、候補を常任理事会で審議し、最終的に理事長が受賞発表と受賞者を決定します。その結果を受賞者へ通知し、併せて学会ホームページならびに『応用心理学のクロスロード』誌上で公表します。なお、副賞として次年度大会の懇親会に無料招待（ただし第1著者のみ）します。表彰式（表彰状の授与）は、次年度大会懇親会の席上で理事長が当該受賞の発表者全員に対して行います。

第77回大会では、大会2日間のポスター発表が対象となり、大会当日に受付で投票用紙（発表題目、推薦理由を記入）が配布されました。会員の皆様はポスター会場を巡回し、発表論文とポスター掲示内容、5分間のショートレクチャー、発表者との質疑応答などを総合的に評価しながら発表賞候補を推薦していました。会場は熱気にあふれ、新設の発表賞が会員の皆様に広く受け入れられたと感じました。

大会参加の会員による投票ならびに常任理事会による最終審議を経て、栄えある第1回「大会発表賞」に下記の4発表（論文ならびに著者）が決定いたしました（順不同、敬称略、○印は第1著者）。

看護学生の事故防止教育の検討―患者の日常生活動作のイメージと危険察知―

○西土　泉・佐野　薫・玉木ミヨ子・今野葉月・蒲生澄美子・関口恵子・宮﨑素子（埼玉医科大学短期大学）

看護学生が遭遇する患者事例をVTR教材化して学習することで事故防止につながるタイムリーな研究であり、医療安全教育の視点から高く評価されました。

小児専門病院放射線科におけるヒューマンエラーの事例分析―子どもの特性とエラーとの関連―

○石舘美弥子（湘南短期大学看護学科）、五十嵐　博（群馬県立県民健康科学大学診療放射線学部）

医療で生起する子どものヒューマンエラーを発達特性に着目して分類しその低減に示唆を与えた研究であること、ポスターの美しさが高く評価されました。

臨地実習で学習困難を経験した時の看護学生のPAC分析

○那須美奈子（新潟県立看護大学大学院看護学研究科）、堀　良子（新潟県立看護大学基礎看護学）

学習困難な学生の内的側面を分析整理する過程を取り上げ、また教育する側に多くの知見を与える興味深い研究であり、将来への発展が高く評価されました。

虚偽検出検査における質問および返答の影響―末梢皮膚血流を指標とした分析―

○石岡綾香・小野洋平（駒澤大学大学院人文科学研究科）、軽部幸浩・谷口泰富（駒澤大学文学部）

厳密な実験計画から得られた成果が実際場面でも十分応用できる有用な研究であること、ポスターやプレゼンテーションの素晴らしさが高く評価されました。

今回受賞された皆様、大変おめでとうございます。

2010年度日本応用心理学会学会賞受賞者の紹介

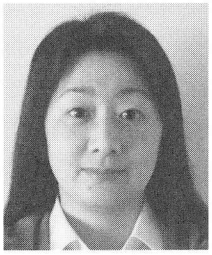
論文名◉視覚・聴覚の二重課題における注意の偏りについての研究

（『応用心理学研究』第33巻第2号、73-83、2008に掲載）

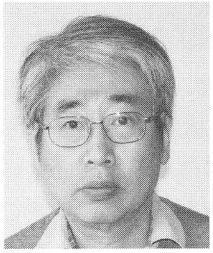
この度は私たちの研究が論文部門で学会賞という評価を頂き、大変光栄に感じております。選考委員の先生方、機関誌編集委員会の藤田主一委員長ならびに編集委員の先生方、論文執筆の際に有益なコメントを頂きました先生方に心よりお礼申し上げます。また、実験・調査に協力して頂いた実験参加者の方々に深く感謝申し上げます。

本研究は自動車運転中の携帯電話の使用における視覚的注意のトップダウンの制御に関する二重課題の影響を調査しました。これまでの研究では、運転中に携帯電話を使うと、電話の操作に加えて会話自体が視覚的注意を妨げることが示されていますが、会話することそれ自身に要求される高次の認知処理の影響について吟味した研究はそれほど多くはありません。本研究は、自動車運転中の携帯電話の使用がなぜ事故につながるのかについて、運転中の携帯電話による会話そのものが前方への視覚的注意を減少させることを大脳半球の情報処理の左右差を考慮して検討しました。特に留意した点は、提示された刺激が自動的に注意を奪う、注意の自動的捕捉の要因です。注意の自動的補足には、刺激の突然の出現とsingletonとよばれているユニークな特徴が重要であることが知られています。本研究では、probe刺激提示それ自体による受動的（bottom-up）な注意制御が起こりにくくするよう刺激配置などを工夫することで、probe検出に能動的（top-down）な注意制御がより強く反映されるようにし、その上で会話が能動的注意配分に及ぼす影響を検証しました。実験の結果、右耳からの入力に比べ左耳からの入力に応答することがprobeの検出成績により大きな悪化をもたらすことが判明しました。こうした自動車運転中の携帯電話の使用とも共通した状況での二重課題の干渉の仕組みを明らかにすることは、日常生活中での事故防止には重要なことであると考えます。

課題に対する注意の能動的容量配分および注意の集中といった注意機能は現実の行動場面での安全性に大きく影響することから、今後はさらに課題を工夫し、対象者を大学生からより一般的な集団へと拡大し、安全に関わる能動的な注意の働きを明らかにしていこうと考えております。そうした研究を通じて、さまざまな行動場面での注意と安全に関わる基礎と応用にまたがる研究に貢献するよう、努力していきたいと考えております。今回の受賞を励みにこれからもいっそう研究活動に取り組んでいきたいと思います。ありがとうございました。



櫻井美由紀（さくらい・みゆき）◉
宮城県生まれ。2010年東北大学大学院情報科学研究科応用情報科学専攻博士後期課程修了。東北大学大学院情報科学研究科博士特定研究員。現在はヒューマンエラーの背景要因としての能動的注意機能の加齢による機能低下の研究を行っている。



岩崎祥一（いわさき・しょういち）◉
福井県生まれ。1978年東北大学文学部哲学科心理学専攻博士課程満期退学。現在、東北大学情報科学研究科認知心理情報学分野教授。専門は、視覚における注意と意識の問題。

大学探訪

研究室におじゃましました

応用心理学の教育を考える
流通科学大学 サービス産業学部

岩崎久志（流通科学大学サービス産業学部教授）

サービスを心理学の観点から学ぶ

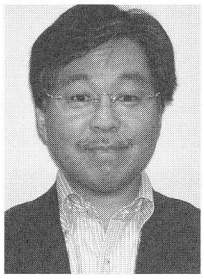
流通科学大学の心理学コースは、サービス産業学部サービスマネジメント学科サービス心理コースといいます。少し長い名前ですが、サービス産業学部サービスマネジメント学科では、サービス産業およびサービス事業部門において、多様性・自主性・先見性に富む人材を育成することを卒業認定の方針であるディプロマ・ポリシーに掲げています。その考えに基づき、当学科には4つのコース（サービスマーケティング、スポーツ健康マネジメント、サービス心理、福祉マネジメント）が設置されています。学生はすべてのコースに共通する幅広い知識と技能、そして選択したコースにおける専門領域の知識・技能を身につけていきます。サービス心理コースでは、心理学とマーケティングおよびマネジメントを組み合わせて、さまざまな人の心にフィットするサービスの提供について学びます。

サービス心理コースのポリシー

私たちは、少子高齢社会、グローバル社会、IT社会、ストレス社会、格差社会など、さまざまな様相をもつ社会に暮らしており、サービス業がその対象とする顧客も多様化してきています。当コースは、心理学の基礎から応用分野まで幅広く学ぶことをとおして、顧客を満足させるサービスを発見し、心理学と関連諸科学により、それらのサービスを提供できる人材を育成しようとするものです。具体的には、顧客の心理を、実験、観察、調査、面接、統計等の科学的手法を用いて分析し、顧客が求めているサービスを明らかにします。そして、先述のように諸心理学とマーケティングやマネジメントの知見を学際的に組み合わせることによって、種々のサービスを提供できる人材の育成・輩出を図ります。このように、本学のサービス心理コースでは、これからの社会でますます求められるサービスについて心理学の観点から実学的に学んでいくことを主な特徴としています。

カリキュラム形成の経緯

サービス産業学部にコース制が導入されたのは、2009年度からです。そしてこのたび、2011年度カリキュラム改訂により、コース制導入時のカリキュラムは大幅に変更されました。2009年度カリキュラムでは、社会福祉コース（現福祉マネジメントコース）と同様に、当コースでも社会福祉士国家試験の受験資格が取得できるようになっていました。そのため、当コースで提供される科目は、心理系科目が20科目、福祉系科目が22科目によって構成されていました。その結果、当コースの独自性が必ずしも明確ではなく、また当コースに所属し社会福祉士をめざす学生には、心理学と福祉学の学習を共に強いるという問題が出てきていました。そこで、2011年度カリキュラムでは、心理系科目4科目を新たに追加して24科目とし、観光、



岩崎久志（いわさき・ひさし）◉流通科学大学サービス産業学部教授。1986年関西学院大学社会学部社会学科卒業、2000年武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科博士後期課程修了、博士（臨床教育学）。臨床心理士、学校心理士。出版社勤務、引きこもり青年のフリースペース、スクールカウンセラーなどの臨床現場を経て、2001年流通科学大学専任講師、2005年同大学助教授、2009年より現職。専門領域は主に教育臨床、臨床福祉学、産業心理臨床。

サービスマーケティング、スポーツ健康、福祉マネジメントの各コースから均等に提供された他コースからの16科目と合わせて、当コースの新たな科目編成がなされました。

当コース独自の学生定員は入学時には決まっていません。サービス産業学部サービスマネジメント学科（定員150名）に入学した学生は、2年次から各コースに分かれていきます。その際のコース選択は学生の意思を尊重することになっています。そこで当コースでは、1年次から概論的な科目だけではなく、当コースの基幹科目の1つであるコミュニケーション心理学をはじめ専門科目も開講し、学生が初年時から心理学の応用領域の一端にも触れることができるようにしています。そして2年次には、心理学実験入門をはじめとする、心理学の体系的な学びへと本格的に入っていくことになります。

ユニークな科目構成

今般の2011年度カリキュラム変更におけるサービス心理コースの科目は、実験計画、心理学研究法など「基礎系科目群」、消費者行動論、組織心理学、対人コミュニケーションなど「ビジネスに役立つ科目群」、およびコミュニケーション心理学、健康心理学、障害者心理学、臨床心理学など「援助を必要としている人をサポートする科目群」から構成されています。現在、当コースには、蜂屋真教授（コース長）、西尾範博教授、中川典子教授、神尾和寿准教授、銅直優子准教授、岩崎の6名の教員が所属し、学生の指導にあたっています。

当コースを構成する心理系の科目について少し紹介させていただきます。まずは基幹科目として、以下の科目が配置されています。心理学研究法（蜂屋真教授）、コミュニケーション心理学（西尾範博教授）、障害者心理学（藤本次郎教授）、消費者行動論（棚橋菊夫教授）、パーソナリティ論（銅直優子准教授）、臨床心理学（岩崎）の6つの専門科目です。一部の科目では、他コースに所属する教員が担当しており、当学科の学際的な性格が現れているといえます。2011年度からのカリキュラム変更により新たに追加された心理系科目には、心理学研究法、ファッション心理学、メディア心理学、キャリア心理学があります。これらの科目と、既存の心理系科目および他コースから提供された科目によって、現代社会で希求されているサービスの発見および提供に資することができるものと考えています。

対人援助技術の諸相を学ぶ

岩崎研究室では、広く対人援助に関わる分野を扱い、とくに教育臨床領域における有効な支援のあり方について研究しています。具体的には、スクールカウンセリングに加えて、コミュニティ心理学、さらにスクールソーシャルワーク（教育福祉）の視点から、子どもを取り巻く家庭や地域といった環境面の影響も考慮に入れた援助方法の開発や実践展開について、わが国の教育現場における課題や可能性を検討しています。今日のように社会の構造が複雑になり、人びとの暮らしのあり様も多岐にわたってくると、対人援助の領域もますます細分化していき、それぞれの特徴が不明瞭になってしまいがちです。そこで、臨床系の心理学だけではなく、医療、看護、福祉、介護、教育といった種々のヒ

ューマンサービスの領域を広く「対人援助」と位置づけ、学際的視点からの新たな支援のあり方について研究を進めています。

岩崎ゼミの正式名称は、「臨床福祉学演習」といいます。臨床心理学を基盤とするカウンセリングや心理療法とは異なる臨床福祉学という独自の視点から、諸領域の問題解決をはかっていくための理論および技法について検討していきます。もちろん、対人援助における心理的ケアは重要であり、臨床福祉学においてもその知見は大きな位置を占めるものです。そのうえで、状況にある人（person in situation）の視点を重視しながら対人関係の相互作用、生活支援、マネジメントなどに向けての処遇や介入について考察していきます。つまり、心理社会的不全や障害の状況におかれている人たちの将来的展望をはかり、十分に満足が得られる創造的な社会適応を達成できるように援助することが臨床福祉学の中心的命題となります。

心理学と福祉学の接点を探る

学生が取り組む主な研究課題は、既存のカウンセリング分野に限らず、広くヒューマンサービスの視点から取り組みが可能と考えられる領域の問題を取り上げ、そこにおける実践的かつ臨床的な問題解決の方法へと広がっていきます。当ゼミでは、臨床福祉学の独自性に関心を抱き、自らも将来的には対人援助に関わっていきたいという意志のある学生の意欲的な参加者を求めています。2年後期から、臨床福祉学に関する基本的な知識を身につけるため、いくつかの関連する文献を輪読します。3年生になると、主にグループごとに任意のテーマを設定し、プレ卒業研究として共同学習を行うとともに、その成果をプレゼンします。3年後期では実習やボランティア体験に基づき、卒業論文のテーマを決めます。そして4年の全期にわたり卒業論文をまとめていきます。これまでの岩崎ゼミ卒業生が提出した卒論のなかから、タイトルを一部ご紹介します。「アダルト・チルドレンの回復過程における自覚の重要性」「大学生の結婚観に関する一考察」「不登校児童に対するメンタルフレンドによる支援の有効性について」「軽度発達障害児の支援における現状と課題」「音楽療法の可能性について」といったテーマです。

以上のように、当ゼミでは、ヒューマンサービスに関わる援助のあり方とその現代社会における可能性についてじっくり考えていくことを主眼に置いています。そのうえで、各メンバーがそれぞれに関心領域を見いだし、心理と福祉を中心にした対人援助に関わるテーマについて、一緒に考えを深めていける場をつくっていきたいと考えています（写真1）。ゼミ生は現在4年生6名、3年生11名、2年生4名で、たまには（？）飲み会やレクリエーションを交えながら、おおむねまったりと学び合っております（写真2）。

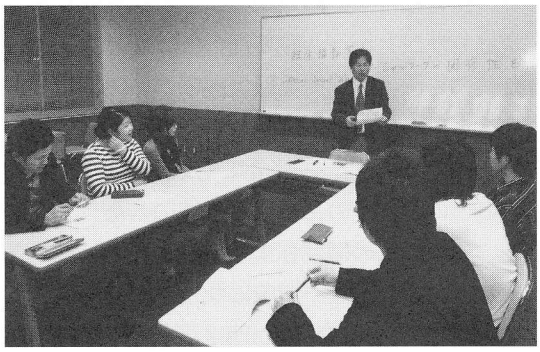


写真1 ある日のゼミ風景

写真2 卒論のテーマをどうするのか、侃々諤々の議論がつづく

職場探訪

車社会の諸問題に取り組む
財団法人日本自動車研究所

大谷 亮（（財）日本自動車研究所安全研究部予防安全第二グループ研究員）

JARIとは

（財）日本自動車研究所（通称「JARI（ジャリ）」）は、1961年に前身である（財）自動車高速試験場として発足し、1969年の改組改称により現在のJARIとなり、2009年度に40周年を迎えた。40年という時間の長さが研究所として歴史があるのか否かはわからないが、日本の自動車産業の歴史とともに歩んできた研究所である。所在地は茨城県つくば市であり、以前には五木寛之の小説「レッスン」にも登場した全周5.5kmの「谷田部のテストコース」が存在した。このテストコースは、2005年のつくばエクスプレスの開業に伴い、茨城県の北部にある城里町に移転した。また、一部の業務は東京にある自動車会館でも行われている。現在JARIの所員数は370名程であり、地球温暖化をはじめとする環境問題から交通事故削減や被害の軽減を目的とした安全に関わる研究業務に至るまで、車社会の諸問題を解決するための業務を遂行している。業務の形態には、国や自動車メーカーなどからの受託研究をとおして、たとえば、国内外の規制化、標準化・規格化や新製品・新技術の評価試験などへの成果の活用を行う場合もあれば、先取り研究や所内研究と称する枠組みのなかで社会の幅広いニーズに応えられるような体制をとっており、中立機関として公正・公平な研究・試験を実施している。

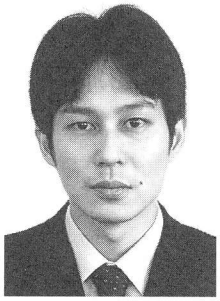
本来であれば、この場をお借りしてJARIの研究業務の全てをご紹介できれば良いのだが、今回は筆者自身が携わる予防安全に関連した研究を中心にJARIの業務をご紹介する。なお、予防安全以外の業務については、JARIのホームページ（http://www.jari.or.jp）と広報誌「自動車研究」をご参照いただきたい。

予防安全に関わる研究と諸施設

JARIのなかで安全に関わる研究としては、衝突安全と予防安全に大別される。衝突安全に関わる業務は、交通事故発生時に被害を軽減することを目的としたものであり、予防安全は交通事故を未然に防ぐことに主眼を置いている。

現在、予防安全に関わる研究業務を行っている所員は28名であり、そのほとんどが工学系出身者で構成され、心理学出身者は数名程度である。しかしながら、交通場面のなかで事故を未然に防ぐ役割を担うのはドライバーを含む人間であることから、予防安全に関わる問題を抽出することや解決策を提案するには、日常の業務において、心理学の方法論やアプローチ、さらには、考え方が必須となっている。

JARIの予防安全研究の内容を示すと、旧来より、ミラー視界やヘッドランプによる見えやすさに代表される灯火器などの評価・研究を実施している。心理学の観点からするとこれらの研究は、ドライバーから衝突の可能性のある対象物が見えるか否かといった閾値の問題に位置づけられ、また、ヘッドランプが他の交通参加者にとって眩しくないか否かを評価する研究は、閾上の問題を取り扱うものである。このほかに、自動車の運動性能に関する実験や、過去には薬剤の摂取がドライバーのパフォーマンスに及ぼ



大谷 亮（おおたに・あきら）◉2002年中京大学文学研究科心理学専攻博士後期課程満期退学。同年（財）日本自動車研究所に入所。入所以来、先進安全運転支援システムのヒューマンマシンインターフェイスに関する研究、車室内機器操作に伴う負担の評価方法に関する研究、および、ドライバーの危険度評価と運転行動に関する研究などに従事。また、児童を対象にした交通安全教育や交通文化をライフワークとして研究している。現在、研究員。

す影響などについても研究を行っており、以上の成果は法規や規制、標準化や規格化の際の資料として活用されている。また、近年では、IT（Information Technology）の進展に伴い、経路案内に関する情報をドライバーに提供するシステムや、衝突の危険性を知らせる機能および衝突の回避が不可能な場合に被害を軽減する機能などのさまざまな先進安全運転支援システムが車社会のなかに導入されつつあり、JARIではこれらのシステムとドライバーとの係わり合いに関する研究を行っている。具体的には、車室内機器操作に伴うドライバーの負担の評価、先進安全運転支援システムに対する過信および不信の影響把握と改善策の提案、経路や危険な状況をドライバーに適切に伝達するためのヒューマンマシンインターフェイスの提案などである。さらに、高齢ドライバーの増加という現状に対応した研究や、飲酒運転が社会問題となったことから、アルコールインターロック装置に関する調査研究も行っている。

以上に示した内容は、その時代その時代の車社会の状況とニーズに対応した研究であるが、このほかに、人的要因からの事故発生メカニズムの解明を継続的に研究している。また、各関係諸団体の多大な努力の成果により、日本における交通事故の発生件数は減少傾向にあるが、なお一層の交通事故の削減やより良い交通社会の実現のために、今までに実施してきたハード面の対策とそれに関わる研究を継続的に実施するとともに、交通参加者の態度を適切な方向に変容させるといったソフト面の対策も重要となる。この点から、安全に志向した態度を有し、他者に配慮できる交通参加者の育成として、幼少期からの継続的な教育が重要と考え、各種の

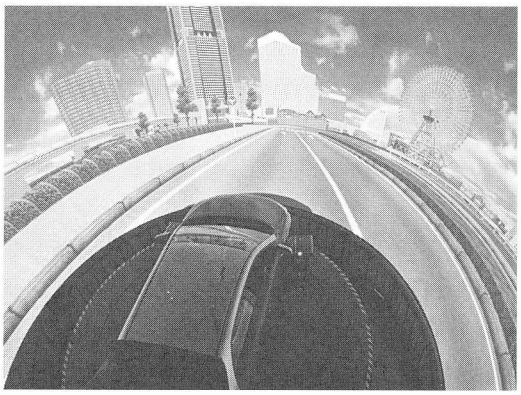


写真1 全方位視野ドライビングシミュレータ

写真2 危険場面再現車両

写真3 模擬市街路の一部
つくばエクスプレスにより秋葉原からつくばに向かう際に、万博記念公園駅と研究学園駅間の右手に見える

安全教育を小学校において実施し、その長所と短所を定量的に把握している。

JARIにおいてこれらの研究を支えているのは、研究員の探究心と社会に少しでも貢献しようとする精神であるが、それを具現化してくれる「技師」の存在は平素の業務においてなくてはならいものとなっている。技師の業務内容としては、実験者となり各種の研究をサポートすることや、実験の目的に応じた車や機材を仕立てることなどがある。さらに、自動車のアセスメントの制動試験では、さまざまな車両の制動性能を評価するためのテストドライバーとして、500Nの踏力でブレーキペダルを操作し、正確なデータの取得を行っている。

また、研究を実施する上でなくてはならないものとして、各種の諸施設がある。JARIの予防安全研究に関わる諸施設には、定置型ドライビングシミュレータと、360度球面スクリーンによる広大な映像表示、および、ターンテーブルなどで構成される動揺装置を備えた全方位視野ドライビングシミュレータ（2009年に完成；写真1）という2台の運転シミュレータがある。さらに、実車前方に液晶モニターを搭載して映像として危険場面を再現する実験車両（写真2）、交差点などを含む一般道路を想定した模擬市街路（写真3）、および、先述したテストコースも有効な設備として利用している。これに加えて、ニアミス時の状況を記録したドライブレコーダにより取得した記録データも事故の発生メカニズムを解明する上で有用なツールとなっている。

交通社会に生きる人々のために

以上のように、JARIでは、技師、事務職員、各種の諸施設、研究員が一体となって、社会に資するための研究を行っている。ここで、実験や調査に際しては、さまざまな価値観を排除して客観的にデータを分析することになるが、一方で、得られたデータから考察を行い、諸問題を解決するには、さまざまな価値を考慮して結論を導き出すことが求められる。同じ数値でも見方（価値）が変われば、解釈も異なるわけである。JARIの研究員に求められることは、その時代の社会に存在するさまざまな界（自動車業界や各種団体など）がもっている多くの価値観を総合的に判断し、車社会の諸問題、特に予防安全の場合には事故を未然に防ぐことを目的として、得られたデータを中立的な観点から考察を行い、問題の所在を明らかする、または、解決策を提案していくことにある。これは、応用心理学に携わる研究者が、現場の視点から研究を行う際に必ず直面する課題と想像する。今後も「交通社会に生きる人々のために」という精神を忘れずに日々の研究業務を遂行していくことが、JARI所員としての使命である。

おわりに

2008年8月にJARI 2020年ビジョンとして、「先進的な研究に挑み、世界のクルマ社会に貢献するJARI」を掲げ、「社会のニーズに応える成果を生み出し、積極的に情報を発信すること」や「自らの行動と社会の接点を認識し、失敗を恐れず挑戦していくこと」をモットーとすることを社会に宣言した。2008年のリーマンショック以降、世界経済は非常に厳しい状況にあり、また、若者の車離れなどJARIを取り巻く環境は変化してきている。しかしながら、このような状況の変化においても、先述した「交通社会に生きる人々のために」という精神のもと、2020年ビジョンを実行していくことがJARIの任務と考えている。

緊急報告

東日本

岩手からの報告

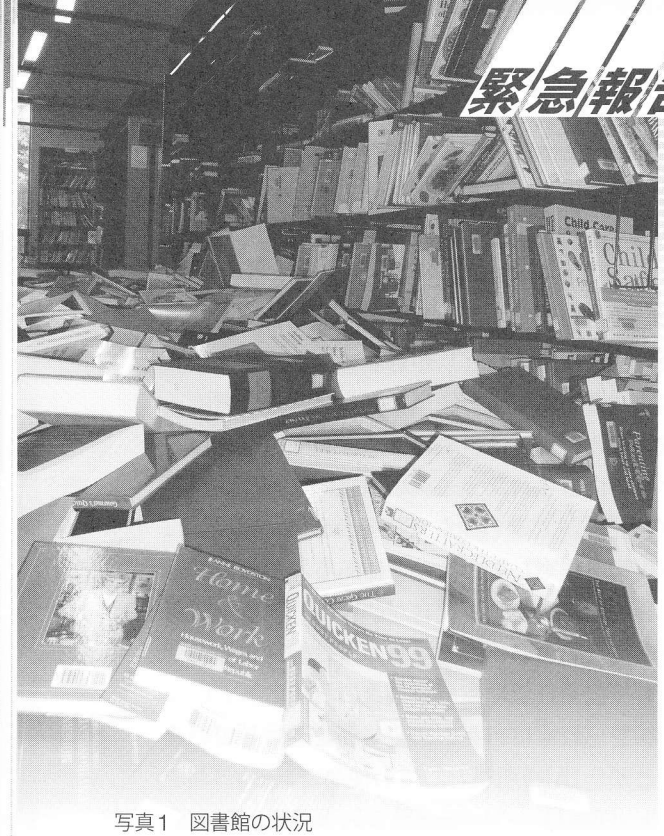


写真1　図書館の状況

余震の続く現場から

本稿の締切矢先、6弱の余震で停電。整理した部屋はまた混乱。翌朝まだ停電は続く。大学に出かけると、GSスタンドは長蛇の列の再現。自家発電の大学は3.11程の被害はなく、研究室は散乱中程度。岩手県大の図書館はようやく整理したところまた崩落。建物被害もあり当分閉館。館員は賽の河原の石積みであると嘆く(**写真1**)。この石積みは現世の話で、大津波に一瞬のうちに命を奪われ、まだ不明のまま瓦礫の下、海底に多くの霊は彷徨う。冥福を祈るのみである。最愛の家族や関係者が非業の運命となった人々の悲しみは無量。心からお見舞いいたします。当地の人は関係者の誰かが悲運に見舞われている。岩手県大の学生は全員生存が確認されたが、宮古の短大では2名が不明のまま。前任校を含め、岩手に在住する多くの卒業生、関係者の安否確認の日々。

"てんでんこ"だけではない人間の心理

深い悲しみの一方で各方面からの援助や復興の動きは着実に起きている。大学でも閉館の図書館の脇、ボランティアセンターに集まる学生がさまざまな作業に当たる(**写真2**)。私はあの時間宮古の短大に出張で到着直前であった。相当な揺れをなんとか凌ぎ到着後さらに大きな揺れに見舞われ、沿岸部は10mの津波が襲来した。短大は高台にあり、津波被害は免れた。留まるべきか迷ったが、同行者が大学事務の責任者であり、盛岡に戻ることとした。通常の道路は不通であったが、山道を使い、その日のうちに停電で暗黒の盛岡に戻った。

"津波てんでんこ"は87歳の大船渡在住の津波史家によるとされる当地の警句である。てんでに(各自が)自分の身を守るように逃げろという意味である。この場合には当てはまらないが、宮古から逃げてきたことは間違いない。人間が本質的なところで自分を守るということと、一方、"てんでんこ"ではなく、職務に殉じ、家族を救助しようと戻り、帰らぬ人となった人間の深層の感動も心理学的に深い意味を持つ。

盛岡は沿岸から離れており、地震被害は相当あったが、津波被害は間接的なものであった。後期入試は延期され、選抜の方法も簡略化した。受験生に明示してきた選抜尺度を変えることの当否は相当議論があった。緊急事態に何をどこまで変更

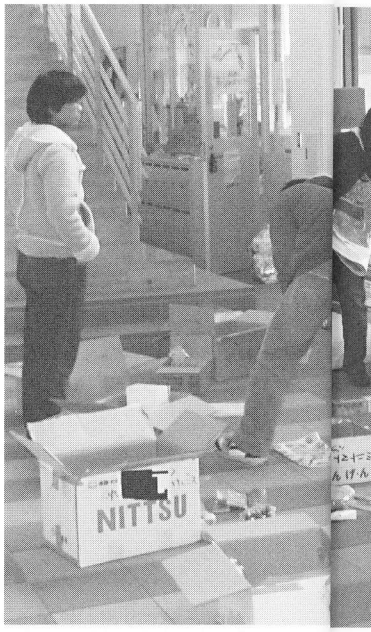


写真2　大学のボランティアセンター

大震災

岩手県立大学教授　**細江達郎**

被災地（宮古）にて

ほそえ・たつろう◉ '43 年長野県生まれ、東北大学大学院修士課程修了、東北福祉大学、東北大学、岩手大学を経て 1998 年以降岩手県立大学教授。専門は社会心理学。研究領域、社会化・反社会化（犯罪）など。青森県下北半島出身の団塊世代を中学時代より現在までフォローアップ調査をしている。方法はフィールド研究。著書：『新訂社会心理学特論』（菊池武剋と共編著、'09、日本放送出版協会）など。応用心理士、臨床心理士。日本応用心理学会理事。

できるかは、組織の意思決定の課題でもある。県等の各種団体の年度末の会議はほとんど延期か中止となった。人的支援に重要な役割を担う県社協理事会が 30 日開かれた。席上、関係施設の被災状況が報告され、大船渡在住の副理事長の安否不明を知らされた。県社協は県の災害ボランティアセンター（BS）の中心であり、沿岸各地の BS を統括する。この時点で、大槌、山田、陸前高田などは役場や社協自体が損壊し BS の立ち上げは困難であった。その後遠野市などの中間支援の設置などを通して、各市町村に BS が設置されていった。

責任者である「いわて被害者支援センター」の理事会も年度末に開催された。理事等から、非常時であり当センターも前線に出るべきだという意見が出された。センターの業務は「災害被災者」を除くこととなっていたが、支援のノウハウを持つ組織として可能な対応をすることとなった。犯罪被害者やその家族が、「自分がこんなに苦しんでいるのに、なぜ太陽は昇り、他の人は普通に毎日を送れるのか」という悲痛な思いをよく吐露する。被災者との異同も重要な課題である。この用務もあり、4 月になりようやく、沿岸の警察署などの公的機関、避難所や学生被災宅さらに、逃げ出してきた宮古短期大学も訪ねた。惨状は報道通りであり（**写真 3**）、避難所は初期に比べ落ち着

センタ　ーの学生達

写真3　被災地に佇む人

写真4　避難所にて

写真5　避難所前の中学生

いているとのことで（**写真4**）、自分の学校が避難所であり被災者でもある中学生が玄関先で肩寄せ合いながら掃除していた（**写真5**）。避難所の運営やその人間関係の変化は、阪神大震災でも多くの研究がなされている。現地での印象は、被害程度に相当の違いがあることである。入り組んだ地形、差し迫った山は同じ市内でもほとんど流失した集落から、内陸側には建物の外形を残す住宅が散見するところ、さらに外見上はまったく被害のないような地域まで多様である。この個別性は被災者においても同様である。さらに時間的経過により変容していく。人はカテゴリー化し、レッテルを張り理解する傾向がある。この心的機制も今回の報道にも散見された。

応用心理学への期待

大災害は人間の営みやその本性を如実に顕してくる。ほとんどの事象に心理学が関わる。

すでに会長メーセージにあるように、応用心理学会は多くの実務分野に関わる専門集団でもある。阪神大震災以来注目された心のケアはもちろん、応用心理学事典ではリスク認知、避難行動、情報、マスメディア、コミュニテティ対応など多くの分野が取り上げられている。今般私も“パニック”という用語を安易に使用するマスコミに注意喚起したり、流言やデマに関する知識を求められるなど、心理学の研究成果の有用性は十分なものがあった。また緊急時に顕著となる上述の単純化思考などの lay theories の功罪については研究蓄積もある。

‘99年、岩手山火山活動の活発化により、岩手県内では行政と研究者がその対策に取り組んできた。当大学で開催された応心68回大会（‘01）で「大規模自然災害が起こった時～災害心理学はどう関わるか～」の公開シンポが行われた。そこでは奥尻復興の当事者および、メンタルヘルス、避難所研究、災害情報の専門家が貴重な提言をしている。私も岩手山火山対策検討委で防災対策ガイドライン作成に関わり、又県の津波避難対策検討委にも参加した。それらの資料を再読してみると、大津波は想定外ではあったかもしれないが、その後の人間行動に関する記述は十分役立つものがあると思われる。もし問題があるとすればそうした成果を多くの人の意識や行動のなかに伝えることができたかどうかである。私は「応用心理学・学会はどうあるべきか」（応心研33-2）で、心理学者の科学的厳密性に対比し多分野の研究者のアバウトな心理学的解釈を挙げたが、災害研究では広範囲な他領域の研究者との積極的な交流が求められる。また研究方法について渥美公秀氏らの研究者は、被災者（援助者も含む）の集合性再構築の過程を、被災者との集合性と研究者としての外部的集合性の2重のズレのなかで捉えていくという視点は看過できない。長期にわたる支援と研究が必要である。

丁度読んでいた葉室麟の「いのちなりけり」のテーマである古今和歌集詠みひと知らず“春ごとに　花のさかりはありなめど　あひ見むことはいのちなりけり”が心に沁みる。これはただ命があることだけでなく、生きている人の命の質を問うものである。（4月9日記す）

特別寄稿

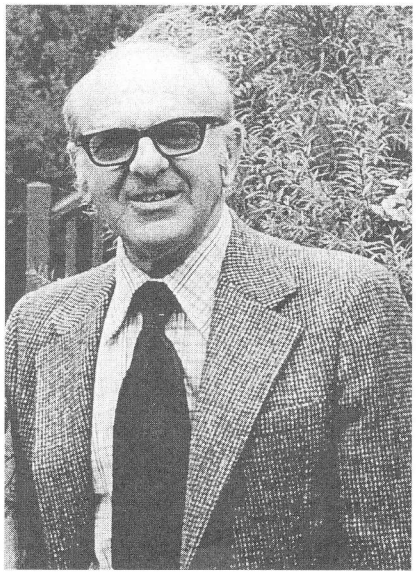
F・E・フィードラーの履歴、業績および思い出（その1）

◉

白樫三四郎

（大阪経済大学人間科学部客員教授／大阪大学名誉教授）

筆者がこれまでの研究生活において最も影響を受けた研究者の1人、フレッド・E・フィードラー教授の履歴、研究業績および彼に対する筆者の思い出などについて述べる。3回にわたる連載で、関連する文献は（その2）に付す予定。



フレッド・E・フィードラー（1979年、著者撮影）

フレッド・E・フィードラー（Fred E. Fiedler）は1922年、オーストリアのウィーンに生まれ、1938年に渡米、シカゴ大学大学院で心理学を専攻し、修士号および博士号を得た後、イリノイ大学およびワシントン大学（シアトル）において長年にわたって研究と教育に当たり、とくにリーダーシップ研究に関してすぐれた研究業績をあげ、産業組織心理学、社会心理学など関連する分野に大きな影響を与えた。主たる著書として“A theory of leadership effectiveness”（邦訳「新しい管理者像の探究」）、“Improving leadership effectiveness”（共著、邦訳「リーダーマッチ理論によるリーダーシップ教科書」）、“Leadership”、“Leadership and effective management”（共著）、“New approaches to effective leadership”（共著）などがある。これまでにストッディル賞（リーダーシップ研究）、産業・組織心理学貢献賞（アメリカ心理学会産業・組織心理学部会）、パーソナリティ・社会心理学伝統創設賞（パーソナリティ・社会心理学研究学会 SPSP）などを受けている。また、国際応用心理学会組織心理学部会長、アメリカ心理学会第1部会（一般心理学）部会長などを歴任している。現在ワシントン大学（シアトル）名誉教授。

1. 誕生と子ども時代

フレッド・エドワード・フィードラーは1922年7月13日、オーストリアのウィーンにおいて父ヴィクター、母ヒルダとの間の一人っ子として生まれた。両親は当時、市内で織物および洋服類販売の店を経営していた。

フィードラーはやがて小学校に入学するが、学校では級友からいじめにあって（主たる理由はクラスで一番身長が小さかったこと、およびユダヤ人であったことによる）、学校生活はあまり愉快なものではなかった。しかしその後フィードラーは難関として知られるギムナジウム（ドイツ語圏の多くの国にあって、その卒業生はそれぞれの社会におけるエリートとして活躍する可能性が高いと言われる）の入試に合格し、将来に明るい展望をもつようになる。しかし、このギムナジウムにおける成績はあまりすぐれたものではなかった。

当時、精神分析のジクムント・フロイト、カール・G・ユングなどが現役の治療者、研究者としてウィーン市内で活躍していたこともあって、父親の話のなかに精神分析関連の話題もよく出てきた。もともとフィードラーは幼い頃から探検家もしくは探偵になりたいと思っていた。フィードラーはみずから何かなすというよりは、むしろ見る（分析する）ことのほうが好きであったらしい。フィードラーは11歳前後の頃、父親の蔵書のなかの心理学関連の書物を読んで、大きくなったら心理学を研究したいという夢をもつに至る。

後年フィードラーはウィーンの上述のギムナジウムを訪ねて、当時の自分の在学成績の記録を見て、あまりよくなかった当時の成績を改めて確認している。その後両親はフィードラーをギムナジウムから通常の中等学校に転校させている。1933年オーストリアの隣国ドイツではヒットラーが政権をにぎり、しだいにユダヤ人への迫害を強めていく。

2. 渡米

フィードラーはアメリカに渡ることを強く希望し、当時インディアナ州に住んでいた遠い姻戚に手紙を出して渡米の希望を訴えた。その願いがかない、フィードラーは1938年（16歳になる直前）単身渡米する。両親は当時すでに上海（ビザなしで入国できた）に向かうことを決めていた。

フィードラーはアメリカに到着後およそ1年間は受け入れてくれた家族とともにインディアナ州サウスベンドで生活するが、その後やがて彼ら家族は健康上の理由から、フィードラー1人をおいてサウスベンドから離れてしまう。フィードラーはそれ以降独力で生きていかざるを得なくなる。

1940年にフィードラーはハイスクールを卒業するが、よい仕事につくことは難しかった。苦労の後やがてミシガン電力に入社することができ、フィードラーは1942年秋、ミシガン州カラマズーの西ミシガン教育大学（現在の西ミシガン大学）に入学する。工学部専攻であったが、これは自分には適していないと感じ、シカゴ大学入学許可を得る。

3. シカゴ大学大学院

シカゴ大学入学を認められた直後、フィードラーは兵役にとられる。第2次大戦終了後の1945年フィードラーはシカゴ大学に復学する。第2次大戦後のシカゴ大学はとても充実していた。総長はロバート・M・ハッチンス（有名な教育学者、古典主義の立場からプラグマティズムや新教育の流れを批判した。もともとシカゴ大学付属実験学校は新教育を根幹とするデューイの指導で有名であった）、心理学部にはルイス・サーストン（知能検査、態度測定など）、リー・J・クロンバック（測定尺度の信頼性指標としてのアルファ係数の創出）、ウイリアム・ステファンソン（因子分析のQテクニークの開発）、カール・ロジャーズ（カウンセリング、非指示的カウンセリングないし来談者中心療法）、ウォルフガング・ケーラー（ゲシュタルト心理学、類人猿の見通し学習）、また社会学部にはウィリアム・F・ホワイト（ボストンのイタリア人コミュニティに対する参与観察、『ストリートコーナー・ソサエティ』）、ルイス・ワース（ユダヤ系移民の適応問題あるいは都市的生活様式＜アーバニズム＞の研究）などなど著名

な研究者多数が在籍していた。

フィードラーはもともと産業・組織心理学を研究することを希望していたが、当時シカゴ大学心理学部には上述の著名な研究者を含めて、心理統計および臨床心理学／カウンセリングという分野にスタッフが偏っていた。フィードラーはよく「そこに自分が研究したいテーマの専門家がいないことをなげく院生が多いが、それよりもむしろ『与えられた現在の環境のなかで自分は何が研究できるか』という視点から取り組まなければならない」と言っていた。フィードラーも産業・組織心理学の専門家がいないことを嘆くのではなく、シカゴ大学のこの現状のなかでまずはカール・ロジャーズの指導を受けつつ、カウンセリングの研究へ入っていった。

大学院入学直後、フィードラーはジュディース（現夫人）と結婚している。2人の間には3人の女の子がある。いまでも夫婦仲はきわめてよい。

白樫三四郎（しらかし・さんしろう）◉1936年生まれ、九州大学教育学部卒業、九州大学大学院教育学研究科修士課程・博士課程修了、教育学博士。西南学院大学、鳴門教育大学、大阪大学、甲子園大学を経て、現在大阪経済大学人間科学部客員教授・大阪大学名誉教授。主著として『リーダーシップの心理学』（単著）、『産業・組織心理学への招待』（編著）、『社会心理学』（共編著）、『メンタルヘルスへのアプローチ』（共編著）、『リーダーシップ理論と研究』（訳編）、『リーダーシップの統合理論』（訳編）など。

4. 博士論文研究

フィードラーは大学院修士課程の頃、シカゴのVA（復員兵士）病院で臨床心理学の実習を受けた。このとき臨床実習指導の担当者はバリバリの精神分析派であった。大学における指導者カール・ロジャーズはもちろん非指示的（non directive）カウンセリングの提唱者である。この両者の対立はフィードラーを大変悩ませることになる。フィードラーはこれをテーマに博士論文研究を計画する。すなわち、精神分析派、非指示的派およびアドラー派の3つの学派に属するベテラン、新人の各カウンセラーが担当するカウンセリング場面のテープを比較・検討しようとするものであった。その結果、フィードラーはこれら3派の間の相違よりもむしろ同一派内のベテラン、新人間の相違の方がより大きいという衝撃的な結果を見出した。フィードラーはこの研究により1949年に博士号を取得している。またこの研究は Fiedler（1950）として学術誌に報告されている。この研究は多くの研究者によってしばしば引用されてきた。

5. カウンセラーの適性に関する研究

フィードラーは博士論文研究終了前後から、将来すぐれたカウンセラーに成長し得る人物の特徴を見出すという課題に取り組むことになる。フィードラーはすぐれたカウンセラーに育ち得る可能性が大きいと評価された研修生は、そうでない研修生よりも自分自身の評定と、担当している来談者のパーソナリティがお互いによく類似していると認知していることを見出した（Fiedler, 1954）。この研究において、「仮定された類似度」（Assumed Similarity）という概念が提唱された。つまりカウンセラーのパーソナリティに関する自己評定と、来談者のパーソナリティに関するカウンセラーによる他者評定とがどの程度類似しているか、ということを問題にしているのである。これが実はフィードラーによる長いリーダーシップ研究の出発点であった。（次号に続く）

海外最新事情

カリブ海の島国、セントルシア国の育児事情

―障害をもつ子ども達とお母さん

森 由隆
（株式会社トータルライフケア）

海外ボランティア

「セントルシア国」と聞いて、多くを連想できる日本人は多くないと思います。私は、この「セントルシア国」で2008年9月から2010年9月まで、独立行政法人国際協力機構の青年海外協力隊員（職種：理学療法士）として、教育文化省管轄の特殊教育ユニットに所属し、特別支援学校と療育園にて、障害をもつ子どもたちに対する医療ケアおよびリハビリテーションプログラムの実施と策定に取り組んできました。本稿では、日本ではあまり馴染みのないセントルシア国の障害児育児の現状を紹介したいと思います。

セントルシア国という国

セントルシア国は、カリブ海小アンティール諸島の南部に位置するウィンドワード諸島の一国で、国土面積は616km^{2}と東京23区と同等の大きさ、人口17万人と非常に小さな島国です。この小さな島国に派遣されて間もない頃、2つのことに驚かされました。1つは子どもの多さです。スーパーマーケット、バス停あるいは街の市場の至る所に子どもたちの姿があり、生徒数1,000名を超える小中学校も数多くありました。世界一の高齢社会である日本から来た私にとっては、子どもの多い日常の風景は新鮮で活気が感じられました。もう1つは、母子世帯いわゆるシングルマザーの多さです。朝の超満員バスのなかで子どもを抱えているスーツ姿の女性、夕方保育所に子どもを迎えに来るエプロン姿のおばさん、リゾートホテルのユニフォーム姿で買い物袋片手に子どもの手を引き家路に急ぐ若い女性、皆仕事と育児に勤しむシングルマザーです。穏やかに波立つビーチや透き通ったカリブ海も素晴らしいですが、忙しそうに子どもを抱えるお母さんの姿は頼もしく本当に感動させられます。

多くの母子世帯は、離婚によるものでなく、法的婚姻関係にない男女関係であるため、家計収入の大部分はお母さんに掛っています。2005年現在で母子世帯を含む女性家計世帯は全世帯の42.8％[1)]と報告されており、多くの女性が働きながら子育てをしています。しかし、子どもが慢性疾患や障害をもっていたらどうなるでしょうか？

次に、セントルシア国で出会った男の子とそのお母さんを紹介します。

子どもとお母さんとの出会い

G君は2歳3ヵ月の男の子で、出産後の検診で脳性麻痺（痙直型両麻痺）と診断されました。首のすわりが未発達、座位保持困難で、日常生活の多くで介助を必要としています。上肢および手指の機能も未発達で、食事時の哺乳瓶の把持やおもちゃ遊びが1人ではできない状況です。

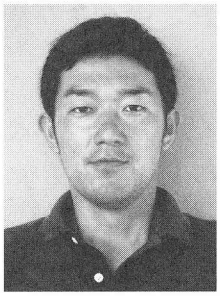
G君は、お母さんと小学校に通う兄弟3人で首都から10km程離れた集落に暮らしています。お母さんはG君を出産する数ヵ月前まではホテル内のレストランでウエイトレスをし、月収EC$1,200（EC$1＝¥40）程の収入を得ていました。育児が落ち着いた頃に復職予定でしたが、G君が脳性麻痺と診断され、療育、育児および家事と仕事を両立することが難しく再就職困難となりました。現在はG君の父親からのEC$800程度の仕送りで月々の生計を立てていますが、不定期かつ少額でG君の療育園通所および兄弟3人の通学に掛る交通費と子どものお昼ご飯代の計EC$13／日を賄い切れないため、G君の定期的通所のみならず兄弟3人も定期的通学が難しい状況にあるようです。お母さんは、「G君が良くなったら、仕事を始めようと思っている。歩けるようになるまでに3年くらいは必要と医師から聞いている」と話しています。

以上のケースはセントルシア国で障害児をもつ母子世帯の一般的なケースで、他の多くの子どもたちもお母さんあるいはおばあちゃんと暮らすケースが多いです。たとえ貧困層でなくとも、障害あるいは慢性疾患をもつ子どもの出産を機に、母親は復職が難しくなり、収入は公的扶助あるいは子どもの父親からの経済的援助に限られ貧困世帯となるようです。現在の母親世代に当たる25～35歳女性の中等教育普及率が30～45％[2]と低く、十分な収入の獲得や子どもの療育との両立が保障される職業に就くことは難しいようです。また、現行の社会保障制度では、社会福祉による経済的支援がないことだけでなく、一般診療の多くは事実上、保険外診療となるために、母子世帯の子どもたちにおいて定期的に教育や医療を受けることは容易ではありません。

セントルシア国では、貧困世帯が全世帯の25％と報告されていますが、世界銀行の定める1日US$1.25以下で暮らす層でなく、ある程度の消費能力のある年間所得US$3,000未満の中間所得層にあたります[3]。しかし、多くのお母さんたちは、医療、保健および特殊教育についての情報をもち合わせていないため、障害をもつ子どもの成長に見通しをもてず、療育や特殊教育といった長期的支援の必要性が認識されていません。このためお母さんたちは、経済的負担を強いてまで、障害をもつ子どもに医療あるいは教育を受けさせることは選ばないようです。肢体不自由をもつ思春期前後の子どもたちでは、乳幼児期から必要な医療サービスを定期的に受けることなく成長するために、二次的な発達の遅れや二次障害が発生し、教育を受けることも困難になっているようです。

働くということ

派遣されて間もない頃、巡回先の療育施設には3名の子どもたちが通所して来るだけで、新しく子どもたちが通所して来ても、翌週から来なくなることばかりでした。この様な状況に、「バス代が払えないから通所が難しいのは当然か」と半ば諦めていました。しかし、休日のカフェや早朝の市場屋台、色々な所で働く女性の姿を見て、あることに気がつきました。家事、育児あるいは仕事を抱え、経済的に余裕の無いお母さんたちが、交通費を払って1時間近くも満員バスに障害をもつ子どもを抱えて施設に来てくれるだろうか、お母さんたちが精神的に安心して子育てができる環境を作っていくことも重要でないだろうか、と。それ以降、日々のボランティア活動では、お母さんたちへ子どものケア方法やリハビリテーションプログラムを伝達するだけでなく、子どもたちを育児するなかで、何に困り不安を感じているのかを聞き出すようにしました。そして、お母さんたちが子育ての見通しをもつことができるように、子どもたちがどのように成長し、その為に子どもたちが何を必要としているかを伝えてきました。途中、紆余曲折がありましたが、療育園を運営する職員と子どもたちのお母さんの協力があり、帰国する頃には22名の子どもたちが通所してくれるようになりました。また、お母さんたちは自分の子どもだけでなく、通所している他の子どもたちも見てくれるようになってきました。



森 由隆（もり・よしたか）◉理学療法士、病院および診療所勤務を経て、2008年より2年間、青年海外協力隊員としてセントルシア国教育文化省特殊教育ユニットにて障害児リハビリテーションプログラムの策定に従事。現在は株式会社トータルライフケアにて脳性麻痺児および要介護高齢者の在宅医療（リハビリテーション）に携わる。

途上国ボランティアあるいは国際協力と聞くと、現地への技術移転をイメージされるかもしれません。しかし、専門的な技術や論理的な計画だけでは、人を納得させられても人の行動までは変えられないのだと身をもって知らされました。相手を理解しようとする姿勢で物事に向き合うことこそが、人の気持ちを動かすのだと信じています。この先、どこでどのように働くことになっても、子育てしながら働くお母さんたちの姿は心に留めておきたいと思います。

参考文献

1）Godfrey St. Bernard, et al.: Major Trends Affecting Families in Central America and the Caribbean. 2003.

2）Property of the Ministry of Education, Human Resource Development, Youth and Sports: St. Lucia Education Statistical Digest. 2005

3）The National Assessment Team of St. Lucia: St. Lucia Country Poverty Assessment 2005/2006.

CROSSROAD ESSAY

私と応用心理学

③

応用心理学者の心理学

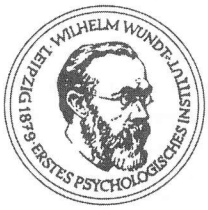
心理学は人間性の科学であるという。それでは科学とはなんだろう。狭義では数学や物理学のような自然科学を指すが広義では単に学問と同義語に使われている。

科学の科の字には *measure* という意味がある。古代中国には科挙という官吏登用試験があったことはよく知られている。心理学は人間性というミクロコスモスを研究する科学であるが、測定するだけでは科学の仕事はまっとうできない。心理学は人間性に内蔵されている法則を見出して wellbeing を構築しようとする大看板を掲げている。応用心理学はその名称が標榜しているように応用が責務である。メジャーだけではダメジャーだと思う。しかし、測定も応用もともに大きな困難性を担っている。

ヴント *vs* J.M.キャテル

1879 年にライプチッヒ大学に心理学実験室を設置したヴントは「例外的なものが規則的なものより少ない心理学の法則はひとつもない」と私たちを落胆させるような言葉を記述している。だが、ヴントは綺麗な法則を求め続けていた。ところが彼のそばで働いていたアメリカ人の J.M. キャテルはヴントが見棄てた例外的なものばかりを収集していた。それを見ていたヴントが「ガンツ・アメリカーニッシュ(まったくアメリカ的だよ)」と呟いたと伝えられている。

科学としての心理学は当然法則定立的(*nomothetic*)な性質をもっている。その性質の根基をなすものは代表値の主人公である平均値 M ($\bar{x}$) と個人差の指標である標準偏差 SD である。



ヴント(1980 年ライプチッヒ大学で開催された第 22 回国際心理学会議の記念スタンプ)

J.M. キャテル

心理学は平均値の科学なのか

1985 年 8 月 12 日羽田発大阪行の日航ジャンボ機が群馬県下の御巣鷹山の山中に墜落し 520 人が惨死してしまった。死亡者の年齢をポリゴンにすると正規分布にきわめて近いかたちになる。一般女性 100 人のヒップの幅もレースクイーン 156 人のそれも正規分布に類似したかたちになる。M は前者が 86.8cm、後者が 85.2cm でその差は僅少であるが SD の差は大きい。レースクイーンのポリゴンの尖度の屹立には驚かされる。

個人の集合体が形づくる心的現象の多くは正規分布に類似したかたちになっている。研究者はこの山型の測定値の塊りのなかから M と SD を探索したり、相関係数(多くの場合は K. Pearson の r であるが)などにも手を伸ばしていく。昔はタイガーの計算器のハンドルを回すのが時代の尖端をいく作業であったが現代はパソコンの時代で、スキャタダイアグラムを見たことがない若者たちを数的世界に誘い込んでいく。心理学は *CAP*(*Computer Assisted Psychology*)の時代に入ってしまったのである。心理学がこの帽子を脱ぐことはもうないであろう。しかし、収得された数値をいかに解釈するかはパソコンの埒外のことなのである。

研究者はサンプル(たいてい教室で収集されたものだ)から計算された M と SD をベースにして論文を書いていく。このサンプルから得られた M や SD は統計量であって母集団のそれではない。それでも研究者の多くはサンプルどまりの仕事を進行させていく。すべての心理テストはこの M と SD という統計量をベースにして作成され、出版社は製品として世に送り出していくのである。

『心理テストはウソでした』という本がある。この本にはある著名な性格テストについての酷評が載っている。このテストは 12 特性をかっこよく測定できるので卒論や学

シャーロック・ホームズの記念切手（1993年英国で発行された4枚中の1枚）

晩年のシャーロック・ホームズ

会発表には打ってつけの道具ではあるが、昭和初期の統計量が規準になっている。12特性も怪しいということが学会でも発表されているが若い研究者はこの安易なテストに蝟集しがちである。このようなテスト公害はわが国のテスト界には充満している。

心理テストには度量衡の原器のような基準がない。0ポイントが設定できないのである。そこでサンプルの平均値が0ポイントになる。偏差値（シグマスコア）でいえば50が0ポイントである。心理テストにおける測定はどんな細密なものでも標準化作業時の*M*と*SD*から生み出されている。サンプルは測定するごとに変動していく。*M*と*SD*もそれにともなって流転する。心理学、特に応用心理学はこの不安定な*M*と*SD*の科学といってもさしつかえないであろう。

シャーロック・ホームズはかく語りき

コナン・ドイルの探偵小説の主人公シャーロック・ホームズは相棒のワトソン博士に次のように話しかけている。「ねえ、ワトソン君、多くの人は解くことのできないパズルのようなものだが集合体（aggregate）のなかに入ると数学的な確実性によって処理されるよ。君はある人がどう行動するかを予測することはできないが平均的な多数人がどう行動するかは正確に当てることができるよ。個人は変動するけれど百分比はほとんど変わらないんだ」と。

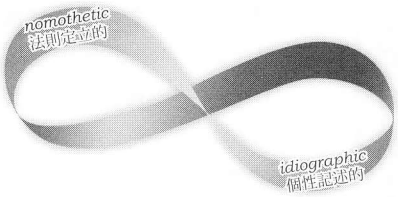
教科書に載っているのは平均的な人間像である。実験動物のイヌやデンショバトが残した記録においても*M*や*SD*が中心になる。大学で平均的なことを学習して実社会で特殊な個人を処理しようとするのは大胆不敵であるが、それでも仕事ができるのだから不思議といえば不思議である。

臨床心理学の真の目的は集合体の予測ではなく飽くまでも個人が対象になる。しかし、Clinical psychologyという語が使われているかぎりlogy（学）である。学となると平均的なこと、一般的なことを記述したり学習したりすることになる。個人を理解するよりはヒトが主題になる。真の目的には日暮れて道遠しである。臨床心理学や実習で単位を取得し資格試験に合格してもなかなか就職口もなくクリニックを開いてもクライエントは来ない。『源氏物語』的にいえば「いとあはれ」で『枕草子』的に書けば「いとをかし」ではないだろうか。

心理学のクロスロード

W. ジェームズは心的な枠組と物的な枠組との十字路から人間を考察しようとしていた。これが「W. ジェームズのクロスロードの仮説」である。二元論を克服する学説で中立一元論と呼ばれる。この雑誌の名称はそこから採ったものではないと思うが、心理学の応用ということを考えるときこの信号機のない交差点を脳裡に描く必要がある。法則定立的な枠組と個性記述的（*idiographic*）な枠組のクロスロードで個人を見ていかなければならない。

私は本学会の第70回大会（流通科学大学会場）のおり開催された応用心理士研修会で次のような図形を提示してみた。「メヴィウスの帯」である。*nomothetic*な見方と*id-*



*iographic*な見方とを循環させて個人を見ていこうとするのである。この循環を満足に運行するためには学識も経験も必須のことであるが、ゆたかな人格を持ってほしいと思う。心理学者といわれる人のなかには、どうしたことか周囲の人に平気で不快感を、それも常時与えている人がいるのはどうしたことであろうか。personalityは状況可変的であると主張している人もいるが、固定的学習拒否的な人もいるようである。

大村政男
（日本大学名誉教授）

おおむら・まさお◉
1925年東京の新宿生。A型Libra。1943年日本大学予科文科→日本大学法文学部文学科心理学専攻入学→卒業後旧制の大学院に1年間在籍→東京少年鑑別所法務府技官→日本大学助手、その後教授、1982年「顕現性不安の構造に関する研究」で文学博士。1995年定年退職。日本大学名誉教授。日本応用心理・日本心理・日本パーソナリティ心理各学会の名誉会員。日心認定心理士No.32、応用心理士No.14。専門は人格心理学。

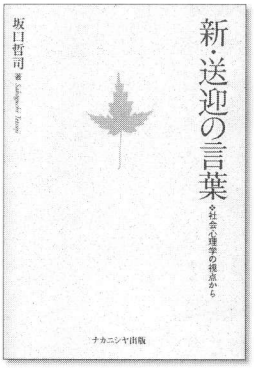
『親を殺す「ふつうの子ども」たち
—「ありふれた家庭」の「ありふれた期待」がもたらす危険』大渕 憲一＝著

2009年8月発行
PHP研究所
本体価格1100円

本書は、1975～2007年の32年間に日本で起こった子どもによる家族殺傷事件148ケースを収集して分析したものである。事件を起こした子どものなかには非行性や病理性のある子どももいたが、大半（86%）は特別な問題を示さない普通の子どもたちであった。90年以前の事件では親の問題行動が主な原因で、酒に酔った父親が母親に暴力を振るうのを見かねて子どもが父親を殺傷するといった事件がしばしば見られた。一方、90年以降は、これに代わって、勉学や進学を巡る親子の葛藤から発展した教育殺人が増えた。医師一家で起こった奈良高1少年母子放火殺人事件のように、親からの強い勉学圧力に耐えかね、子どもがこのストレスから逃れようと暴力を振るうというものである。子どもによる親の殺傷は、学歴志向と受験戦争が親子関係にもたらすひずみの一断面である。当初、私は書名を『現代日本の車輪の下』としたいと思っていた。結局、折れて出版社の決めた書名にしたが、今でもこの点に悔いを残している。

大渕憲一◉東北大学大学院文学研究科教授。専門は社会心理学。

『新・送迎の言葉—社会心理学の視点から』
坂口哲司＝著



2010年12月発行
ナカニシヤ出版
本体価格700円

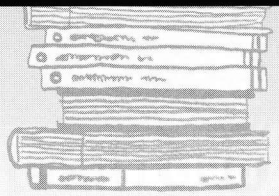
これまで、卒業生への贈る言葉として書いてきたものと新年を迎える「年賀状」に、その年の世相を反映し、いかに一市民として迎えていくべきかの視点からの提言を、自戒を込めて書いてきた。

さらに、兼任講師をしてきた大阪赤十字看護専門学校が、100期生の卒業生を出した。それを記念して、卒業文集に寄稿してきた数編を追加して出したのが、拙著である。

柔軟にしなやかに生きていければ、人生の摩擦も和らいでほどほどの人間関係もできるのだが、生き方が下手で肥後モッコス気質もあり、ずいぶんと損な人生を繰り返してきた。それでも良き友や恩師や知人を得られたことは、本当に有り難いことだった。拙著から、生き方や身の処し方を見つめ直す契機にしたと言っても過言ではない。

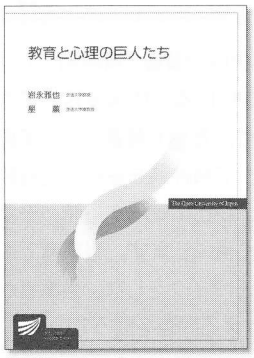
このような人生への思いも重ね合わせながら四半世紀にわたるそれぞれの歳月についての社会的義憤や公憤を、社会心理学の視点で提起してきたものをまとめて世に出したいと思ったのが、拙書である。

坂口哲司◉大阪総合保育大学児童保育学部教授。専門は社会心理学。



『教育と心理の巨人たち』

岩永雅也・星　薫＝編



2010年3月発行
放送大学教育振興会
本体価格2300円

この本は、放送大学の教科書として誕生した。本書は初学者に、教育学、心理学に興味をもってもらうことを狙いとして書かれたもので、それぞれの「巨人たち」の代表作を「読んでみる」ことを基本にしている。ただし、書いている我々も、それぞれの「巨人」を専門に研究してきた人間ではないので、「読者である学生たちより、ちょっと先輩の人間が、自分なりに理解した内容を後輩に伝える」といった趣旨で貫かれている。だから、出来上がって一番「勉強した」と実感したのは、実は著者たちだった。

本書では、唯一の日本人の「巨人」として、桐原葆見（しげみ）先生をご紹介した。日本の応用心理学の「草分け」でいらっしゃる桐原先生だが、今日ほとんどその名を忘れられてしまっていることを残念に思っていたが、今回私自身、桐原先生から多くのことを教えられたと、強く感じている。

星　薫◉放送大学准教授。専門は心理学。

『ありがとう療法　入門編・実践編

―幸せになる自己カウンセリング』橋本泰子＝編著

2010年11月発行
おうふう
［入門編］本体価格1600円
［実践編］本体価格1200円
※［体験談編］
本体価格1400円も発売中

この10年来、自殺者が3万人を越し、孤独死の増加も問題になっている。原因の1つとして対人関係の希薄化があげられる。対人関係を良くするポジティブ心理療法としての「ありがとう療法」がある。提唱者の勝俣瑛史（かつまたてるちか）（国際医療福祉大学大学院教授）によれば、「ありがとう」の一言は、「情緒安定の3A（愛情Affection、受容Acceptance、承認Approval）の要求」を同時に充足し、情緒安定が促進される魔法の言葉である。入門編では、理論・臨床・基礎の3部構成により、発達・心理テストや脳波での実証的な基礎研究の基盤の上に、体験談も交えて、認知行動療法からの事例検討による臨床への可能性が示されている。実践編では、臨床事例、体験談、高齢者のうつ予防、脳波と心理テストによる事例検討が述べられている。川柳に「ありがとう」を加えて、自己カウンセリングとして提案されている。文字も大きく、カットがあり、一般の方にも読みやすい本で、「珠玉の名著」と書評もされている。

橋本泰子◉桜美林大学名誉教授。専門は、臨床心理学。

心理学から見たおすすめDVD紹介

DVD『精神』

◎2008年、想田和弘監督作品、135分。
◎国際的に高い評価を受け、釜山国際映画祭、ドバイ国際映画祭で最優秀ドキュメンタリー賞など海外映画祭での受賞多数。

©2008 Laboratory X, Inc.

精神科診療所「こらーる岡山」に通う患者さんとその世界にカメラを向けた観察映画

この映画は精神科外来診療所「こらーる岡山」が舞台の観察映画と呼ばれるドキュメンタリー作品です。「こらーる岡山」に通いながら地域やそれぞれの場所で病いと向き合い、集う統合失調症などの当事者とその家族、彼らを支える山本昌弘医師、スタッフ、訪問看護師やボランティア、地域の人々が素顔で登場する日常を描いています。私は、この作品の特徴はカメラを回す想田監督自身が登場人物と対話し、診療所での出来事に巻き込まれながら撮影が行われた点にあると考えます。事前の打ち合わせもせず台本もなく、ナレーションなどによる説明や音楽も使わないなどのスタイルは想田監督により観察映画と名づけられています。見る者も先入観や思い込みにとらわれず、自らの目で観察し感じとり考える作業が求められます。登場人物が素顔で肉声で語る幻聴や妄想の体験、自らの手で子どもの口をふさぎ、子どもを亡くした母親…リアリティある病いの語りを、カメラを回す監督と登場人物が対話するその現場を、見る者は監督の目線を追体験しつつ自分自身の感覚を頼りに受けとめなければなりません。

監督は東京大学宗教学科在学中、参加観察の手法で卒業論文制作に取り組んだ経験があるそうです。確かに監督の「こらーる岡山」での居合わせ方は、フィールドに参加しながらインタビューしてデータ収集する研究者のスタンスとよく似ています。心理学や看護学で質的研究に取り組む研究者にとって、いざフィールドに入った時、どのようなわきまえでどのような居合わせ方をしたらよいか、この映画には豊かなヒントがあると思います。

モザイクを使わず「見えないカーテン」を開ける

「見えないカーテン」とは社会と精神障害者との間を隔てる偏見やスティグマを喩えた監督の表現です。映画には20歳頃、統合失調症を発症し40年間病いを抱えて生きてきた今中さんが登場します。「そのビデオは、取材は、なんか具体的にあるの？」と監督にズバリ撮影の目的を尋ねます。監督が自分の言葉で必死に「見えないカーテン」をめぐって今中さんと対話する様子も映し出されます。監督は2010年にはNHKの教育番組「福祉ネットワーク」にも出演、2009年出版の著書『精神病とモザイク：タブーの世界にカメラを向ける』（中央法規）でも「見えないカーテン」を語ります。番組や著書のなかで東大生時代に「燃え尽き症候群」で精神科を受診した経験も語られます。精神障害者がテレビに登場する時、モザイクで顔を隠された映像はよく目にします。当事者でもある監督が『精神』を制作し、モザイクをしない当事者が出演することでメディアのかかえる問題を問うています。映像をとおして撮影中の監督と当事者との対話のなかには、監督の温かい人柄や眼差しの観察も感じられます。

「想田さん、ソーダ買うてきてもらえん？」

「想田さん、ソーダ買うてきてもらえん？」は高校時代に発症した後、約25年間山本医師のもとに通院する菅野さんのダジャレです。カメラを回す監督とユニークなペースで対話し、「自分の心の傷を癒す最良の方法は何か言うたらな、相手の傷に包帯を巻くことなん。したら自分の傷が癒される。人の悩みを聞いたりしようたら自分の心も癒される」と話した後に、「はい、カット！」と監督の役を奪って大笑いします。

作品には愛嬌のある菅野さんのような当事者も含めさまざまな人が登場しますが、最後の登場人物によるラストシーンは印象的です。見る者も監督と共に状況に巻き込まれ最後の最後で覆されます。自分は何を理解したつもりで見ていたのかと「見えないカーテン」と向き合い続けるべき自分が居たことに直面させられます。見る者が自由に感じ考えることができる観察映画です。精神障害者をめぐる偏見の研究では、精神科医療従事者の偏見やスティグマの問題もテーマです。『精神』は精神障害者を取り巻く社会の側や当事者自身のなかにもある「見えないカーテン」の存在、偏見やスティグマの問題を真正面から考える材料を生き生きと提供してくれる映画だと思います。

好評発売中（上映権付・団体向けDVDもあります）
お問合せは（株）アステア　03-5459-1173へ

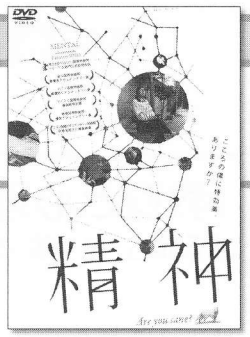
小平朋江　こだいら・ともえ◉聖隷クリストファー大学准教授。看護学修士。大学時代は和光大学で心理学を学ぶ。専門分野は精神看護学で教員になる前は精神科看護師。実際に精神医療の現場やフィールドに関わりながら、また統合失調症当事者が執筆した手記や闘病記の収集など、ナラティブを手がかりにした研究に取り組んでいる。

心理学から見たおすすめDVD紹介

DVD『精神』

◎2008年、想田和弘監督作品、135分。
◎国際的に高い評価を受け、釜山国際映画祭、ドバイ国際映画祭で最優秀ドキュメンタリー賞など海外映画祭での受賞多数。

©2008 Laboratory X, Inc.



精神科診療所「こらーる岡山」に通う患者さんとその世界にカメラを向けた観察映画

この映画は精神科外来診療所「こらーる岡山」が舞台の観察映画と呼ばれるドキュメンタリー作品です。「こらーる岡山」に通いながら地域やそれぞれの場所で病いと向き合い、集う統合失調症などの当事者とその家族、彼らを支える山本昌弘医師、スタッフ、訪問看護師やボランティア、地域の人々が素顔で登場する日常を描いています。私は、この作品の特徴はカメラを回す想田監督自身が登場人物と対話し、診療所での出来事に巻き込まれながら撮影が行われた点にあると考えます。事前の打ち合わせもせず台本もなく、ナレーションなどによる説明や音楽も使わないなどのスタイルは想田監督により観察映画と名づけられています。見る者も先入観や思い込みにとらわれず、自らの目で観察し感じとり考える作業が求められます。登場人物が素顔で肉声で語る幻聴や妄想の体験、自らの手で子どもの口をふさぎ、子どもを亡くした母親…リアリティある病いの語りを、カメラを回す監督と登場人物が対話するその現場を、見る者は監督の目線を追体験しつつ自分自身の感覚を頼りに受けとめなければなりません。

監督は東京大学宗教学科在学中、参加観察の手法で卒業論文制作に取り組んだ経験があるそうです。確かに監督の「こらーる岡山」での居合わせ方は、フィールドに参加しながらインタビューしてデータ収集する研究者のスタンスとよく似ています。心理学や看護学で質的研究に取り組む研究者にとって、いざフィールドに入った時、どのようなわきまえでどのような居合わせ方をしたらよいか、この映画には豊かなヒントがあると思います。

モザイクを使わず「見えないカーテン」を開ける

「見えないカーテン」とは社会と精神障害者との間を隔てる偏見やスティグマを喩えた監督の表現です。映画には20歳頃、統合失調症を発症し40年間病いを抱えて生きてきた今中さんが登場します。「そのビデオは、取材は、なんか具体的にあるの？」と監督にズバリ撮影の目的を尋ねます。監督が自分の言葉で必死に「見えないカーテン」をめぐって今中さんと対話する様子も映し出されます。監督は2010年にはNHKの教育番組「福祉ネットワーク」にも出演、2009年出版の著書『精神病とモザイク：タブーの世界にカメラを向ける』（中央法規）でも「見えないカーテン」を語ります。番組や著書のなかで東大生時代に「燃え尽き症候群」で精神科を受診した経験も語られます。精神障害者がテレビに登場する時、モザイクで顔を隠された映像はよく目にします。当事者でもある監督が『精神』を制作し、モザイクをしない当事者が出演することでメディアのかかえる問題を問うています。映像をとおして撮影中の監督と当事者との対話のなかには、監督の温かい人柄や眼差しの観察も感じられます。

「想田さん、ソーダ買うてきてもらえん？」

「想田さん、ソーダ買うてきてもらえん？」は高校時代に発症した後、約25年間山本医師のもとに通院する菅野さんのダジャレです。カメラを回す監督とユニークなペースで対話し、「自分の心の傷を癒す最良の方法は何か言うたらな、相手の傷に包帯を巻くことなん。したら自分の傷が癒される。人の悩みを聞いたりしようたら自分の心も癒される」と話した後に、「はい、カット！」と監督の役を奪って大笑いします。

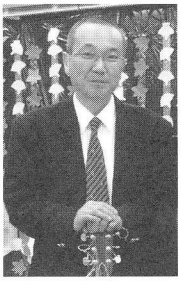
作品には愛嬌のある菅野さんのような当事者も含めさまざまな人が登場しますが、最後の登場人物によるラストシーンは印象的です。見る者も監督と共に状況に巻き込まれ最後の最後で覆されます。自分は何を理解したつもりで見ていたのかと「見えないカーテン」と向き合い続けるべき自分が居たことに直面させられます。見る者が自由に感じ考えることができる観察映画です。精神障害者をめぐる偏見の研究では、精神科医療従事者の偏見やスティグマの問題もテーマです。『精神』は精神障害者を取り巻く社会の側や当事者自身のなかにもある「見えないカーテン」の存在、偏見やスティグマの問題を真正面から考える材料を生き生きと提供してくれる映画だと思います。

好評発売中（上映権付・団体向けDVDもあります）
お問合せは（株）アステア　03-5459-1173へ

小平朋江　こだいら・ともえ◉聖隷クリストファー大学准教授。看護学修士。大学時代は和光大学で心理学を学ぶ。専門分野は精神看護学で教員になる前は精神科看護師。実際に精神医療の現場やフィールドに関わりながら、また統合失調症当事者が執筆した手記や闘病記の収集など、ナラティブを手がかりにした研究に取り組んでいる。

ケアマネージャーの独り言

佐伯典彦



さえき・のりひこ◉1959年大阪生まれ。栃木県立宇都宮東高校、岡山大学卒。放送大学大学院文化科学研究科修士課程修了。市社会福祉協議会、専門学校専任教員、特別養護老人ホーム、老人デイサービスセンター等を経て、社会福祉法人青山福祉会 居宅介護支援事業所あおやま 介護支援専門員《介護福祉士》。近著：『ひとりふたり―介護の現場から』『仏教社会福祉入門(介護ケアとその担い手=分筆)』(いずれも法藏館)。日本応用心理学会、日本仏教社会福祉学会、日本福祉文化学会、仏教看護ビハーラ学会会員。

■ はじめに

三重県の伊賀地区でケアマネージャーをしています佐伯と申します。本学会の定期刊行誌にみだしの執筆をせよとのこと。私ごときが書かせて頂いてよいものか、正直戸惑っております。サブタイトル通りの「独り言」を書かせて頂きます。

そもそも本学会との出会いは、前理事長岡村一成先生との出会いから始まりました。当時勤務しておりました専門学校と富士短期大学（現東京富士大学）は提携関係にありました。「心理学入門」のような授業を確か担当していました。大学は経済学科に在籍していたくせに、本棚には心理学書や仏教書ばかり。哲学科にいた後輩の卒業論文も手伝いました。スイミングクラブのインストラクターの仕事の時間の方が、大学滞在時間より長い生活でした。亡き父から「経済学科にいるくせにおまえは本当に不経済なやつだ。国立大学にいっているおまえのようなやつは、本当に税金の無駄遣いだ」とまで言われました（!?）。そんな私ごときに岡村先生からお声かけを頂き、勧められ本学会に入会し、諸先輩方の研究発表を3年拝聴しておりましたら、「いい加減に研究発表をしなさい！」と先生から叱咤激励が…。その当時の先生の助言がなければ、現在暇をみて論文や執筆活動をすることはなかったと思います。実は応用心理士も先生の勧めがなければ申請しませんでした。そんないい加減な私です。

■ 人生の節目（「応用心理士」が役立つ時）

家庭の事情で専門学校の教員を退職し、地縁のない今の居住地に転居しました。どうせやるなら「どっぷり浸かれば、スパッと抜けられる」との思いで、ヘルパー2級資格をとり今所属している法人とは別の特別養護老人ホームに入職。ひと月たらずで1人夜勤をする無茶苦茶な生活で、夜勤明けの公休日に短大の非常勤講師もしておりました。

当時体力勝負だけが取り柄の私が、ただがむしゃらに仕事をして半年たった頃、夜勤の夜2：30の話です。

「死やしてや（死なしてや）。もう痛うてかなわんのや。死やしてや」、またT氏のつぶやきが始まりました。このつぶやきが始まるとしばらくは止みません。「Tさん、そんなこと言わんといてや。私悲しいで」「まあTさん見てや。園庭の桜の蕾があんなに開いてきたで。寒い冬通り越して、桜の蕾も精一杯咲こうとしているんやで」「Tさん、そないに言うても人の生きる死ぬは、神さん仏さんしかわかりませんわ…」。その当日の担当介護職員が、知恵を振り絞って声かけしていきます。でもどの声かけもその場しのぎにはなるが、T氏のつぶやきの解決には繋がりませんでした。「私はもうだめです。早く死にたいわ」と呟かれるお年寄りは多いです。そんな時思わず「そんなことありませよ」と否定しがちになります。そんな時「私もいつか死ぬ身である」という言葉に置き換えます。「苦の連帯感を表現することが終末期のお年寄りには必要なのではないか。老若男女問わず、人間の生老病死が必然ならばいずれ一緒の世界に戻っていくはずだ」。私はそんなことを当時考えました。T氏のフェイスシートを眺めている時、T氏のお子さん、お孫さんがそれぞれ元気にされていることがわかり、こんな声かけをしてみました。T氏「職員さん。もう死やしてや」佐伯「Tさんお子さんは元気ですか？」T氏「元気や」佐伯「お孫さんは元気ですか」T氏「元気や」佐伯「Tさん。あのね、昔ある商売を大きくやっているおじさんが、偉いお坊さんのと

ころへ行って、家に飾る掛け軸にめでたい言葉を一言書いてって頼んだんですって。そうしたらそのお坊さん『親死ぬ。子死ぬ。孫死ぬ』って書いたんですって。そうしたらそのおじさん、そんなんいややからもう一度書いてって頼んだんですって。そうしたら今度は『孫死ぬ。子死ぬ。親死ぬ』って書いたんですって。そんなんなおさらいややっておじさんが言うたら、お坊さんが『何いうてんねん。この世で一番めでたいことは、年とったもんから先に死ぬことや。かわいい孫が死んだら、小さい子のいる40歳そこそこの親が死んだらどうする。世の中順番通り死ぬことは一番めでたいことや』って言わはったそうです。私は凡人やからTさんがいつ死ぬかわからないけど、Tさんの話くらいなら聞けるし、おむつ交換もずっとさせてもらいますよ。『先のことは思い煩うなかれ』って昔の人が言ってますよ」と声をかけたら、T氏は笑顔で「わかりました」と応えてくれました。その後私の夜勤の夜2:30頃、T氏の居室から「あ～」という声がよくするようになり、訪室するとT氏が笑顔で待っている、というオマケもついてきましたが…。T氏の以前のようなつぶやきは格段と減ったのは間違いありませんでした。釈尊は人々に仏法を説く時「対機説法」といって、その時聞こうとしている人によって言葉のかけ方を変え、そのような人々でもわかりやすく法を説いたと言われます。この時は一休禅師が語ったとされる説話を咄嗟に思いつき声かけしました。当時の駆け出し介護職の私が、T氏の苦悩にできる限り「共苦」し、そしてT氏の一期一会のご縁である「関係性」と真剣に向き合おうとした結果、咄嗟の説話を思いついたのだと思います。

意識が明瞭で、身体が虚弱化し、それまでできていた身の回りのことが少しずつできなくなってきたお年寄りは、こんな状態では生きる意味が見出せないと感じ、「もう終わりにしたい」と口にすることがよくあります。どう頑張っても自分だけでは解決できない問題の前で、多くの人が「自分が存在する意味を失ってしまう」という事態に直面します。「存在する意味を失った時の心の痛み」のことをスピリチュアルペインと呼ぶのではないかと思います。人間が人生の終わりにさしかかる時、自分が生きる意味を見出せず早く終わりにしたいと望む状況は本当に悲惨です。「T氏のような利用者の苦悩に耳を傾ける。その存在をありのまま受け止める。ベッド上で寝たきりで、食事・入浴・排泄に全介助が必要になっても、再び生きる意味を見出してほしい。この世に生を受けた人間が、自分で生きてきた意味を、そして今を生きる意味を納得できれば、この世を去っていく意味も見えるのではないか」、12年前の私はこんなことを考えていました。

■ 仏教と心理学の間柄？

正直に告白しますが、ここ7年ばかり日本応用心理学会の大会は「さぼって」おりました。主に日本仏教社会福祉学会で発表・論文執筆をしておりました、といっても私は学者ではないので合間をみてぼちぼちやっております。そんななか最近漠然と思っていることは…。

仏教では、我・自我というものはここに存在すると思いこんでいるだけで、そんなものはどこにもないと捉えます。また物と心の集まりは皆実体のない「空」であり、物と心は縁によって生じ縁がなくなれば消滅するものとも捉えます。また仏教では人間の「煩悩」は「欲望（貪）」「怒り（瞋）」「無知（痴）」の三毒で構成され、これらの煩悩がくりかえしパターン化され、抜け出せなくなった状態を「執着」と呼びます。仏教では人間がこの「執着」を捨てるあるいは離れるよう繰り返し説いています。しかし見方をかえれば、本来「本当の自分」=「ありのままの自分」=「アイデンティティ」とは、三毒が集積し凝り固まった「執着」ではないでしょうか。応用心理学ではアイデンティティを研究テーマとして扱い、仏教では執着は捨て去るべきものとして扱う。まさに私は自己矛盾の世界にいるのでは…、と思っていた時期があ

りました。

また一方、釈尊は人々が抱えている苦しみや問題を解決するために、「対機説法」という方法を用いて法を説きました。相手の性格や能力、素質に応じて、相手が理解できるように説くことで、聞く側は自分の問題の解決法を具体的に吸収できます。相手が実際に直面している苦しみ、悩み、落ち込んでどうしようもなくなっている問題を解決するためにダイレクトに法を説いたと言われます。まさに「元祖カウンセラー」ですね。これを発展させた分野に「仏教カウンセリング」があります。先ほどの「空」に対して、悩みや苦しみを「仮」と捉えます。本質的に悩みや苦しみは「空」であるが存在しないのではありません。この時、とらわれの心を離れて、なるべくしてなっていることへの気づきを促します（こだわりの認識！）。そして受け止め方を少し変えれば固定的な見方がなくなり共存の道がみつかると「仏教カウンセリング」では考えます。

「癒し」ということばは、東京工業大学准教授（文化人類学）の上田紀行氏が考えられたのですが、「癒し」とその先の「救済」の目指すべきベクトルの長さの違いが、仏教と心理学の違いなのかなと最近は思っています。

■ 心理学・応用心理士に期待すること

今までの日本は、政策的にますます個人の利己心を煽るようにして社会を活性化しようとしてきました。新自由主義、市場原理主義などの資本主義でも極めてゆがんだ部分を拡大化するようなイデオロギーのもと、自分の利益を最大化することが社会の幸せになるといわんばかりの改革が進められました。それが世界の潮流でもあるでしょう。競争こそが社会の根本原理。他者と競争し「勝ち組」となって利益を手にするという動機づけからの行動こそが、強い国や社会を生み出すのだという浅はかな社会観・根本原理がまかり通ってきたという印象をもっています。それがリーマンショックをきっかけとした変化のなかで、例えば派遣労働者の年越し村が民間の組織から生まれたり、タイガーマスクの主人公の名を借りランドセルを寄付する運動がおこったり、東日本大震災後の復興に本当に多くのボランティア希望者が集まったり（私も地震当日は栃木県宇都宮市にいました…）、「物質から人へ」国民の目が向けられるような変化がみられました。それは弱肉強食的な浅はかな哲学からは、決して人の人生を支える深い意味はもたらされ得ないという学びなのではないかと思います。いかにしたら本当に利他的な社会、1人ひとりが他を思いやり助け合える社会を建設できるのか、今後の心理学・応用心理士にこの点を期待しています。

■ 結語

特別養護老人ホームからデイサービスセンターへの転勤後、介護福祉士を取得。今の在籍法人のデイサービスセンターの生活相談員となり、その間介護支援専門員（ケアマネージャー）を取得。その後現在の部署のケアマネージャーの仕事にたどり着きました。この仕事は、看取りを含めて、その利用者のケア全体に関わって、良い方向へ導く面白さ、また関わる有難さ等、他職種にない価値があります。しかしケアマネージャーの倍程生きてきた利用者をケアプランで変えようとすること自体に無理があり、おおらかに構えることが必要です。筆者はついつい自分の意見を押し付けたり、声高に主張しがちです。利用者を支える黒子・裏方に徹すること。こうしなければ、と考えをめぐらせるあまり、高齢者のこれまでの思いに共感することを忘れ、自分の意見を優先しがち…。その抑制ができる自戒をこめて業務に取り組むよう気をつけています。我をもって他の我を侵すこと、互いに我を主張して譲ろうとしない人間関係は決して好ましいものではありません。我（己）を空しくして生きることがいかに大切か、この仕事をしているとしみじみと感じられます。そう、自分自身のバカさ加減を忘れず常に意識すること…。

日本応用心理学会認定「応用心理士」資格認定申請のご案内

「応用心理士」認定審査委員会

本誌の「応用心理士の現場」では、応用心理士資格を生かして活躍する会員の皆様をご紹介しています。多種多様な分野で心理学の知見を発揮される会員が1人でも多くなりますよう、ぜひ資格の取得をお勧めします。

本資格申請は、「学会入会後2年を経た」時点で可能です。

学会で認定する「応用心理士」は、学会員の専門職としての資質があると認められた証明になります。

認定の要件は、「応用心理士」資格申請の手引き（第6版）に記載の通りですが、次の各号の1つに該当するかを踏まえ委員会で認定するものです。

（1）学校教育法において定められた大学または大学院において、心理学専攻又はこれに準ずる分野を卒業あるいは修了した者（学位授与機構の審査により学士の学位を授与された者も含む）。

（2）本学会機関誌「応用心理学研究」に1件以上の研究論文を発表した者、又は本学会の年次大会において2件以上の研究発表をした者。

（3）認定審査委員会が応用心理学と関係あると認めた専門職で、3年以上の経験を有する者。

（4）応用心理学と関係ある職で3年以上の経験を有し、本学会研修委員会企画の「研修会」に5回以上参加した者。

■ 資格申請の手続き

以下の順序に従って申請の手続きをお願いします。

1 ハガキで「資格申請書類を希望する」と「返送先」を明記し、事務局まで請求してください。

2 申請書類の請求がなされると、必要書類が希望者に送付されます。受け取られたら、申請書類に所要事項を記入し、同封の封筒で送付してください。

3 審査料10,000円は、郵便為替で送金してください。

郵便振替の振込先

口座番号　00110-6-359059

加入者名　日本応用心理学会

（注）申請書類一式のなかに同封されている郵便為替用紙をご利用ください。

4 提出する申請書類は次の通りです（提出の際確認してください）。

① 様式1（資格認定申請書）

（注1）所定の枠内に証明書用カラー写真（ヨコ3cm×タテ4cm）を貼付してください。

（注2）裏面に審査料の振込金受領証をコピーして貼付してください。

② 様式2-1（履歴書）

③ 様式2-2（業績書）

④「研修会」参加を資格要件とする場合は、「受講証明書」5回分を添付してください。

5 認定委員会では、提出書類について審査し結果を文書にて申請者に通知します。

合格した人は認定料30,000円を納入してください。

入金されますと「応用心理士」認定証を交付し、本学会機関誌「応用心理学研究」に掲載して公表します。

今年度後期の受付期間は、12月末日です。

日本応用心理学会認定「応用心理士」事務局
〒169－0075
東京都新宿区高田馬場3－8－1
東京富士大学応用心理学研究室内
E-mail: ukiya@fuji.email.ne.jp

北星学園大学◎濱 保久

第79回大会開催校・研究室紹介

2012年の日本応用心理学会第79回大会は北星学園大学でお引き受けすることになりました。思い返せば1991年に本学で第58回大会が開催されてから早いものでもう20年が経ったことになります。当時、私は最も若い心理系のスタッフとして北星に移ってきたばかりでしたので、てっきり大会運営のほとんどすべての仕事をやらなければならないだろうなと覚悟していたのですが、実際は大坊郁夫先生（当時は北星学園大学勤務）が大車輪の活躍で、私はただただ下働きをしているだけでよく、気がついたら学会が無事に終わっていたという感じでした。あの時あまりにも楽をさせていただいた分、今回はしっかりと仕事をしなければならないようです。

北星学園大学は一応札幌市にはありますが、車で5分も走らないで隣の北広島市に行けるくらいの町外れに位置しています。元々は湿地帯で数十年前は一帯玉ねぎ畑だったところが札幌市の成長、発展に伴って町の体を成してきた地域です。しかし、ここ大谷地は飲食店こそ少ないですが、こと交通の便という点では最高です。千歳空港から高速バスに乗って約40分で大谷地バスターミナルに着き、そこから大学まではサイクリングロードを散歩気分で歩いて5分ほどです。また、都心までも地下鉄東西線で20分ほどですので発表後に不夜城ススキノに繰り出すのにも便利です。さらに会期終了後、登別温泉などへ足を延ばされる場合も、バスターミナルから簡単に行くことができます。つまり、大谷地は交通の要所でありどこへ行くのもすこぶる便利であるということです。学会の開催日時はまだ確定していませんが、おそらく9月開催になると思います。最近の気象は変則的で予想は困難ですが、例年通りなら日中はもっとも過ごしやすい気候だと思います。道路も広く走りやすいのでレンタカーで遠出されてもよいでしょう。

北星学園大学が属している学校法人北星学園の歴史は古く、1887年に女性宣教師サラ・C・スミスが開いた「スミス塾」に遡ります。キリスト教に根差した女子教育から始まった北星学園でありますが、時代の要請に応じ1962年に男女共学の4年制大学を設立、現在に至っています。学園内には北星学園大学付属高校・中学、北星学園女子高校・中学、北星余市高校があり、それぞれが特色のある教育を展開しています。北星学園大学は、現在、文学部、経済学部、社会福祉学部、短期大学部の4学部から構成されています。心理学系の学科は1996年に社会福祉学部開設と同時に福祉心理学科として誕生したのが最初ですが、その後の改組転換で2002年に文学に心理・応用コミュニケーション学科も新設されました。福祉心理学科では一般的な心理学教育を基盤としながらも臨床分野に力を入れているのが特徴です。一方、心理・応用コミュニケーション学科は、心理学を基盤としコミュニケーションを科学すると同時に現場感覚の涵養に力を入れているのが特徴です。教員の約半数はマスコミ系や国際系など心理学者でない多様な教員で構成されています。日本応用心理学会の会員は現在それぞれの学科に1名ずつおります。私は心理・応用コミュニケーション学科に所属しており、1年次必修の「コミュニケーション心理学」、2年次選択の「産業心理学」、3年次選択の「プレゼンテーション演習」などの座学の他に2年次選択の「フィールド実習産業系建築班」も担当し、農作業と建築作業を学生に体験させております。福祉心理学科の豊村教授は1年次必修の「心理学基礎実験」（4名で担当）、2年次選択の「心理学研究法Ⅰ＆Ⅱ」、「福祉心理学」と「障害児心理学」（それぞれ隔年）を担当しています。

第79回大会はこの2名で切り盛りしていかなければなりませんので、大がかりな事は難しいかと思います。むしろ皆様方の自発的な動きを支援するという姿勢に徹し、小さいながらも自由な雰囲気の大会にできたらなと考えております。発表はもちろんのこと多くの自主企画に声をあげていただければと願っております。

編集委員長◎川本利恵子

機関誌編集委員会からのお知らせ

応用心理学会会員の皆さまには、機関誌「応用心理学研究」にいつも変わらないご支援・ご協力をありがとうございます。

まずは、3月11日に発生しました東北関東大地震で亡くなられた、あるいは被災されました多くの方々に対しまして、心よりお見舞いを申し上げます。現在も、東北 関東地方を中心とした地震に伴う様々な影響下にある皆様におかれましては、地震に端を発した予断を許さない、先行きの見えない福島原発からの放射線の危険な状況は多くの方々に絶えず強い不安をもたらし、国民の生活に及ぼした影響は計り知れない状況になっております。ここに改めて、多くの日本応用心理学会会員の皆様方が1日でも早く以前の生活に戻れますよう、九州の地より心より願っております。

さて、先般、平成23年2月初旬ごろに機関誌「応用心理学研究」の第36巻1号を発刊させていただきました。新たな体制で編集業務をすすめ、「新編集事務局」による初めての発刊となりました。「編集事務局」の深澤副編集委員長には、なれないなかで大変ご尽力いただき、また、学会事務局からもお忙しい日々にもかかわらず快く原稿をいただくなど、皆様のご支援に心より感謝申し上げます。これらの編集過程をはじめて経験いたしましたが、改めて多くの会員の皆様に支えられて成り立っている機関誌であると実感しております。

以上が機関誌発刊における感想ですが、第36巻1号の内容は原著2編、短編2編と特集が主な内容でした。機関誌は、年間2号を発刊しますが、本年度は事務局体制の変更に伴い、第36巻1号が大幅に遅れての刊行となり、皆様には多大なるご迷惑をおかけしております。近々第36巻2号を発刊する予定ですが、2号にはこれまで審査の終了した論文を多数掲載する予定にしておりますので、楽しみにお待ちいただければと思います。

また、審査の6部門ですが、部門によっては投稿論文が集中し、審査に要する時間に差が出てくる事態となり、苦情が寄せられております。部門では、部門責任者と副責任者の2名の委員を中心として査読の手配と編集業務を進めていますが、委員は本務を抱えての査読委員という役割を担うので、部門によっては2名では量質ともに十分に対応しきれない状況が出ているようです。

そこで、皆様に査読の実情をご理解いただくために、査読の過程を再度紹介させていただきます。まず、最初に、皆様の投稿された論文は、事務局で受け取り、連絡を受けた各部門責任者が査読者2名を選定し、査読を依頼します。

審査期間は査読回数によって異なりますが、1回修正の場合には約3ヵ月から4ヵ月かかります。さらに修正がある場合、2回目以降の査読者の審査期間は約3週間、投稿者の修正期間は1～2週間の期間が必要となります。また、2名の査読者の結論が一致しない場合は、第3の査読者に依頼し、審査の公平性を担保するように努めておりますので、もっと査読期間が必要になります。最終原稿を受領後、編集委員長および編集事務局に審査完了報告が行われ、その後、印刷会社と編集委員長と編集事務局で機関誌全体の編集作業を進め、皆様の手元に機関誌が届くという手筈となっております。

このように審査期間が長くかかりますので、審査が終了し「採択」となりました投稿者の方には、証明書を発行いたしますので、お気軽にお申し出下さい。また投稿論文が多い部門は今後改善をしていかなければならないと強く思っております。

以上のような現状ですが、今後も会員の皆様が不利益を被らないような、かつ投稿しやすい運営方法について検討していきたいと考えておりますので、変わらぬご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 投稿論文の送付先：「編集事務局」
〒169－0075 東京都新宿区高田馬場3－8－1
東京富士大学　経営学部
ビジネス心理学科　深澤伸幸研究室気付
「日本応用心理学会 機関誌編集委員会」
TEL：03－3362－1229（研究室代表：内線314）
E-mail：n-fukazawa@fuji.ac.jp

事務局だより

日本応用心理学会の入会申込書を次にご案内しますので、入会を希望する方はお申し込み下さい。
このページをコピーし必要事項を記入して、下記事務局宛までご郵送下さい。

日本応用心理学会入会申込書（正会員用）

申込年月日（20　　年　　月　　日）

フリガナ		推薦者（正会員） ㊞	
氏　名			
ローマ字		性　別	男　　女
		生年月日	19　　年　　月　　日
現住所	〒		
	電話番号	（　　）	
最終学歴	［　　年　　月］【在学中のものではなく、卒業あるいは中退・修了したもの】		
所　属	名　称		
	所在地	〒　　電話番号　　（　　）	
	職名・身分		
研究領域			
メールアドレス			
備　考			

◉記入上の注意

1. 楷書で正確に記入して下さい。
2. 正会員の入会資格は、会則第4条第2項に次のように定められています。
   (1) 4年制以上の大学で心理学およびその隣接分野を専攻した者
   (2) 第1号に準じる者
      (1) の隣接分野とは以下の分野を指しています。
      教育学、児童学、人間関係学、体育学、社会学、社会福祉学、芸術学、宗教学、医学（心身医学、精神医学、行動医学など）、看護学、経営学、認知科学（人工頭脳など）、人間工学、など。

   (1) の入会資格に該当しないと判断される場合は、備考欄に高等学校卒業後の学歴および職歴をできるだけ詳しく書いてください。(2) の第1号に準じる者と認めることができるかを判断する資料とします。記入欄が不足したときは別紙に書いて添付してください。
3. 社会人学生の場合には、在学大学（大学院）名等詳細を備考欄に記入してください。
4. 推薦者には、必ず、署名のうえ捺印してもらってください。
5. 推薦者がいないなどの相談がある場合は、学会事務局にご連絡ください。

日本応用心理学会事務局：〒169-0075　東京都新宿区高田馬場4-4-19　㈱国際文献印刷社内
電話：03-5389-6491　FAX：03-3368-2822　E-mail：jaap-post@bunken.co.jp

事務局受付〔　　〕　審査〔　　〕　本人連絡〔　　〕　会費納入〔　　〕

原稿募集

『応用心理学のクロスロード』では、皆様の原稿を募集してます（執筆者の紹介・推薦も受け付けてます）。

● 募集コーナー

①「ホープ登場　クロスロードの星」
対　　象　応用心理学を研究中の大学院生
原稿字数　3000字以内（写真、図表を含む）

②「大学探訪　研究室におじゃましました」
原稿字数　4800字以内（写真、図表を含む）

③「職場探訪」
原稿字数　4800字以内（写真、図表を含む）

④「CROSSROAD ESSAY」
原稿字数　3000字以内（写真、図表を含む）

⑤「海外最新事情」
原稿字数　4800字以内（写真、図表を含む）

⑥「心理学から見たおすすめDVD紹介」
原稿字数　1300字以内（写真、図表を含む）

⑦「BOOK REVIEW　本を出しました」
対　　象　2010年7月～2011年7月の間に刊行分の会員の書籍（自薦・他薦は問いません）
原稿字数　430字以内

⑧「応用心理士の現場」
原稿字数　4500字以内（写真、図表を含む）

⑨「その他」
本誌の感想・意見、日本応用心理学会へのメッセージなど

● 4号の原稿締切　2011年8月31日

（※5号以降に掲載させていただく場合もあります）

● 応募方法

原稿は、連絡先（住所、電話、メールアドレス、所属）を必ず明記して、お送り下さい。デジタルデータの場合はメール添付ファイルにてお送り下さい。掲載の採否については広報委員会で決定させていただきます。なお、お送りいただいた原稿は返却いたしません。予めご了承下さい。

● 送り先

［郵送］
〒240－8501　横浜市保土ヶ谷区常盤台79－4
横浜国立大学　藤森研究室気付　日本応用心理学会
「応用心理学のクロスロード」原稿募集係

［E-mail］　fujimori@ynu.ac.jp
件名に「応用心理学のクロスロード」原稿応募とお書き下さい。

広報委員会（五十音順）

委員長　藤森立男　横浜国立大学
委　員　内山伊知郎　同志社大学
加藤博己　駒澤大学
田中真介　京都大学
蜂屋　真　流通科学大学
星　薫　放送大学

応用心理学のクロスロード　Vol.3

（年2回発行）

編集・発行　日本応用心理学会
〒169-0075
東京都新宿区高田馬場4-4-19
TEL　03-5389-6491
FAX　03-3368-2822
E-mail　jaap-post @ bunken.co.jp
HP　http://wwwsoc.nii.ac.jp/jaap/

編集協力・製作　福村出版株式会社
デザイン　公和図書株式会社デザイン室
印刷・製本　モリモト印刷株式会社

2011年6月10日　発行

編集後記

応用心理学のクロスロード3号をお届け致します。

3号の特別対談には宇宙飛行士の山崎直子さんをゲストにお迎えし、夢を叶えることの大切さ、家族の支援、困難を乗り越える方法、宇宙開発への応用心理学の貢献などについて、とても興味深いお話を伺うことができました。山崎直子さんは開放的で率直な人柄であり、大変好感のもてる方でした。今後も、山崎直子さんとご一緒できる機会がありますことを期待しております。

また、3月11日（金）には東日本大震災が発生し、東北地方と関東地方を中心に多数の尊い生命が奪われるという大惨事が起きました。緊急に、細江達郎先生（岩手県立大学教授）に大震災の最前線の様子を報告していただきました。突然のお願いにもかかわらず、執筆をご快諾いただきましたことに、感謝致しております。今回の東日本大震災は大地震による被害だけでなく、その後の大津波の襲来、さらには原子力発電所の放射性物質漏洩という多重被害を引き起こしており、被災者に次々に「降り積もるトラウマ」をもたらしています。こうした降り積もるトラウマは、被災者にこれまで指摘されているのとは異なる心理面への慢性的な悪影響を及ぼすことが考えられます。被災者に対する心のケアを含む精神健康への長期的対策が求められることは当然ですが、さらに、政府の情報収集・意思決定の問題、災害時のロジスティックス、マスコミの災害報道、災害ボランティア、災害文化と教訓の活かし方など、多面的な災害研究が必要になると思われます。

月刊誌
労働の科学

産業保健や人間工学はじめ安全健康課題に関わる最新の情報や研究、取り組みを紹介。充実した特集と、大学研究室やメーカーからの発信、いじめ・暴力・ハラスメント防止対策、GP－広がる良好実践など多様多彩な連載。

2011年度各月号の特集
1：ヤングワーカーの実態とホンネ
2：組織的なメンタルヘルス対策の実際
3："健康会計"入門
4：脱クルマ社会の交通安全
5：化学物質管理が変わる
6：温暖化する地球で熱中症とたたかう
7：ワークライフバランスが拓くもの

B5判 毎月10日発行
年間予約購読12,000円(本体11,429円)

学術誌
労働科学

労働と生活と環境に関する総合的研究をめざすわが国唯一の学術専門誌。原著、総説、資料、症例報告、諸外国の文献紹介、学会だよりなど多岐にわたる内容で、研究者・学会に高評。

【投稿】をお待ちしています。

B5判 年6回発行
年間予約購読 8,000円(本体7,619円)

〒216-8501
川崎市宮前区菅生 2-8-14
電話 044-977-2121
FAX 044-977-7504
URL http://www.isl.or.jp
E-mail shuppan@isl.or.jp

財団法人労働科学研究所

おすすめします！ 育児の教科書『クレヨンしんちゃん』

6月刊行！

生きる力を育むマンガの読ませ方

徳田克己〈著〉 定価1470円（本体1400円+税）
A5判／並製／176頁 ISBN978-4-571-11026-9

子どものモデルとなり、子どもの育ちに良い影響を与えるマンガの効能と読ませ方を、心理学者が研究にもとづいてわかりやすく解説。子育て、親育ちにおすすめの1冊です。

- "おまぬけ"のほうがいいんです。現実的な子育てのモデルが、ここにあります。
- 男の子の子育てに悩むお母さん。男の子の特徴がよくわかります。
- どうやって"イクメン"になったらいいかわからないお父さん。まずはひろしの家族愛に涙しましょう。
- 『クレヨンしんちゃん』を好きでないお母さん方へのメッセージ。
- マンガを読む子は読解力が高まります。
- 子どもにはたくさんのモノサシが必要です。
- ぎゅっと抱きしめれば子どもはすくすく育ちます。
- 混迷の時代どんな困難にもくじけず立ち向かっていく力をつけましょう。 …などなど

「クレヨンしんちゃん」臼井儀人／双葉社

福村出版 〒113-0034 東京都文京区湯島2丁目14番11号
TEL 03-5812-9702 FAX 03-5812-9705
http://www.fukumura.co.jp

心理・教育のためのRによるデータ解析

服部 環〈著〉 ◎4000円 ISBN978-4-571-20076-2
統計解析ソフトRの多変量データ解析法を、練習問題の解法を解説しながら実習的に学ぶ。R実践書の決定版！

生涯スポーツの心理学

生涯発達の視点からみたスポーツの世界
杉原 隆〈編著〉 ◎2800円 ISBN978-4-571-25039-2
生涯発達の視点からスポーツ心理学を再考する。生涯スポーツの指導にかかわる全ての人たちの必読書。

日本の子ども虐待 第2版

戦後日本の「子どもの危機的状況」に関する心理社会的分析
子どもの虹情報研修センター〈企画〉 保坂 亨〈編著〉
◎6800円 ISBN978-4-571-42034-4
戦後日本の子ども虐待に対する社会の認識や施策の変遷等、膨大な文献調査をもとに詳述する。07年初版の増補版。

子育て支援と心理臨床 vol.3

子育て支援合同委員会〈監修〉
『子育て支援と心理臨床』編集委員会〈編集〉
◎1700円 ISBN978-4-571-24532-9
心理臨床の立場から子育て支援の役割と情報を発信。年2回刊行。VOL.3特集「子育て支援者を育てる」。

◎＝本体価格

ナラティヴから読み解くリジリエンス

ー危機的状況から回復した「67分の9」の少年少女の物語ー　S. T. ハウザー・J. P. アレン・E. ゴールデン著　仁平説子・仁平義明訳　A5・286頁・2940円

一握りの者だけが虐待・養育放棄などの破局的状況に打ち克てたのは何故か。縦断的インタヴューに基づく対照群との比較から見えてきた真実。

愛着と愛着障害

ー理論と証拠にもとづいた理解・臨床・介入のためのガイドブックー　V. ブライア・D. グレイサー著　加藤和生監訳　A5・336頁・2940円　虐待や育児放棄との関連で注目を集めている愛着理論。臨床場面での手引きとなるよう，理論のエッセンスをはじめ，学術的な証拠に基づいた具体的な査定・介入の方法を紹介。

学習の問題への認知的アプローチ

ーPASS理論による学習メカニズムの理解ー　J. R. カービィ・N. H. ウィリアムス著　田中道治・前川久男・前田　豊編訳　A5・328頁・3465円　ダスのPASS理論（プランニング，注意，同時処理，継時処理）を基に，読み，書き，算数にかかわる学習機制や，つまずきの特徴を詳細に論じ，指導の手がかりを提供。

現代の認知心理学5　発達と学習

日本認知心理学会監修　市川伸一編　A5・360頁・3780円　実証的知見を踏まえつつ，学校での教科の学習を中心に教育的介入を意図した実践的研究の紹介に力点を置く。メタ認知や学習観の形成，文章理解，数学的問題解決，科学的概念の獲得など，具体的な教育実践に多大な示唆を与える。

北大路書房

〒603-8303
京都市北区紫野十二坊町12-8
☎075-431-0361　FAX 075-431-9393
http://www.kitaohji.com
振替 01050-4-2083
▶価格は定価(税込み)で表示しています

認知心理学研究の現在を一望！　**現代の認知心理学〔全7巻〕**　日本認知心理学会 監修

第1巻　知覚と感性　三浦佳世 編
第2巻　記憶と日常　太田信夫・厳島行雄 編
第3巻　思考と言語　楠見　孝 編
第4巻　注意と安全　三浦利章・原田悦子 編
第5巻　発達と学習　市川伸一 編
第6巻　社会と感情　村田光二 編
第7巻　認知の個人差　箱田裕司 編

●各巻A5判・約350ページ・予価3,780円

応用心理学事典

日本応用心理学会　編　　編集委員長：岡村一成
A5判・692頁　定価21,000円(税込)　ISBN978-4-621-07807-5

細分化された現代心理学の諸分野の研究水準を浮き彫りにし、今後の研究活動に有効な情報を提供。心理学に関心を持つ方が心理学に対する偏った知識を無くし、社会においてさまざまな問題解決に役立ち、読み物としても楽しめる待望の中項目事典。

カウンセリング実践ハンドブック　新刊2010年11月刊行

編集委員長　松原達哉　　日本カウンセリング学会　編集協力
A5判・700頁　予定価15,750円(税込)　ISBN978-4-621-08301-7

心理学の理論から開発されたカウンセリングの理論や技法をいかに実践するかを集大成。カウンセリングの基礎と共通概念からさまざまな場面における重要テーマを抽出し、わかりやすく2～4頁で解説、最新情報が網羅されたハンドブック。◎**臨床心理士、スクールカウンセラー、家裁調査官、児童相談員、精神科・心療内科スタッフなどに役立つ内容。**

産業・組織心理学ハンドブック

産業・組織心理学会　編
A5判・582頁　定価13,650円(税込)
ISBN978-4-621-08118-1

社会学事典

日本社会学会社会学事典刊行委員会　編
A5判・976頁　定価21,000円(税込)
ISBN978-4-621-08254-6

応用倫理学事典

加藤尚武　編
A5判・1008頁　定価21,000円(税込)
ISBN978-4-621-07922-5

宗教学事典　新刊2010年11月刊行

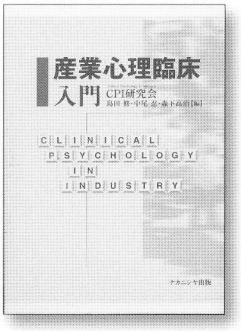
星野英紀・池上良正・氣多雅子・島薗 進・鶴岡賀雄　編
A5判・700頁　定価21,000円(税込)
ISBN978-4-621-08255-3

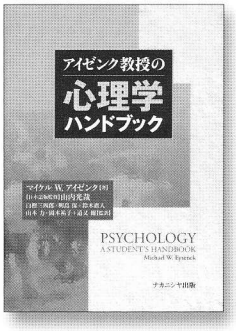
MARUZEN 丸善株式会社 出版事業部
〒140-0002 東京都品川区東品川 4-13-14 グラスキューブ品川 営業部TEL(03)6367-6038 FAX(03)6367-6158
http://pub.maruzen.co.jp/

産業心理臨床入門

CPI研究会
島田 修・中尾 忍・森下高治 編

近年その必要性が叫ばれる、職場でのメンタルヘルスの理論と実践について、産業場面の第一線で活躍する臨床心理士たちがわかりやすく解説する。 2940円





アイゼンク教授の心理学ハンドブック

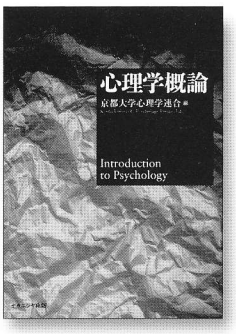
マイケル・W・アイゼンク 著
日本語版監修 山内光哉
白樫三四郎・利島 保・鈴木直人・山本力・岡本祐子・道又 爾 監訳

アイゼンクがたった一人で書き上げた現代心理学入門書の決定版。 23100円

産業・組織心理学エッセンシャルズ【改訂三版】

田中堅一郎 編

理論を中心に、それらを応用し実践するきっかけとなるように分かりやすく解説。代表的な研究例、歴史・研究の流れも詳しく紹介。 予価2940円



心理学概論

京都大学心理学連合 編

教育学研究科から霊長類研究所まで、学部を越えた京都大学心理学系教員総勢45名による、学術的に正確かつ読みやすく、スタンダードな本格的大型テキスト。心理学の先端的研究を支える将来の研究者の養成はここから始まる。 3150円

リハビリテーション・カウンセリング

渡辺三枝子 監修／藤田有香 著

ハンディキャップが社会を生きるうえでの障害にならない社会を目指して、障害者のキャリア形成を支援するカウンセリングの理念・理論・方法を解説する。 1995円

コミュニティ心理学入門

植村勝彦 編

多様なコミュニティにおける社会問題に積極的に取り組み、人が本来もっている強さとコンピテンスを重視しながら人々のエンパワメントを支援していく新しい心理科学入門書。 2520円

PAC分析研究・実践集1

内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸 太一 編

特定個人の個別事例を質的・記述的に分析するPAC分析を最大限有効に使うために、その理論と技法をわかりやすく概説する。 2625円

PAC分析実施法入門【改訂版】

内藤哲雄 著

従来の科学論に変革を迫る理論と技法！ 人文・社会科学から工学・自然科学にまで適用可能なイメージ構造の事例的分析に不可欠の書。 1890円

大学生のキャリア発達

未来に向かって歩む

宮下一博 著

大学生のいま何をすればよいのか。進路・職業・人生に関するワークシートで自分の現状を知り、キャリアに関する諸学者の理論を学び、一歩リードした就職活動を示す。 1575円

仮想世界ゲームから社会心理学を学ぶ

「個」を科学する新技法への招待

広瀬幸雄 編著

現実と同じように、飢餓、貧困、失業、社会不安、テロリズム、経済停滞、紛争、環境汚染など様々なリスクが存在する仮想世界ゲームを通して、人と社会の関係を理解する。 2100円

成人発達臨床心理学ハンドブック

個と関係性からライフサイクルを見る

岡本祐子 編著

発達心理学と臨床心理学の観点から人間が大人として人生を生き抜くことの様々な心の局面をとらえ、その光と影について考察する。 5040円

エコロジカル・セルフ

河野哲也 著

ギブソンの生態学的心理学に則ったエコロジカル・アプローチから、パーソナリティを身体性、倫理性まで含め包括的に考察する。【クロスロード・パーソナリティ・シリーズ 1】 2100円

メディアとパーソナリティ

坂元 章 編著

テレビ、テレビゲーム、インターネット、ケータイなどの身近なメディアが性格にどのような影響を及ぼすのかを検証する。【クロスロード・パーソナリティ・シリーズ 2】 2100円

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
TEL 075-723-0111 FAX 075-723-0095
http://www.nakanishiya.co.jp/

【価格税込】

○DVD○ ビジュアル教育心理学入門 全10巻

監修：三浦香苗（昭和女子大学教授）

青年期の心身の発達や学習過程に加え、今日的な課題や傾向についても取り上げ、教育方法や技術、生徒指導との関連やその基礎となるべき事項をドラマや再現シーンを用いて具体的に示し、教育心理の中核的な内容や事柄を分かりやすく解説します。

DVD　カラー　各巻約30分
価格／DVD
各巻　63,000円（本体60,000円）
対象：大学、教育機関

1 青年期の特徴　指導：三浦香苗（昭和女子大学教授）

青年期には身体や運動能力はもちろん内面的な精神構造にも大きな変化が生じます。その結果、文法や数学のような抽象的・論理的教科の学習が可能となり、自分を取り巻く現実や未来について批判的に考え、思考する世界も拡大します。また、大人の権威から離脱し、自立した人間になるよう努力し、新しい人間関係を構築しようとします。

大人への過渡期にある中・高校生の時期の青年の特徴について解説します。

2 動機づけとやる気　指導：大芦 治（千葉大学准教授）

動機づけは学習に対する意欲、やる気などと言われ、どうすれば意欲がわき、やる気がでるのか、あるいは、どうして人は無気力になってしまうのか、教育心理学の中でも重要なテーマの一つです。

外発的動機づけ、内発的動機づけ、学習された無力感など動機づけに関する実験の紹介を通して、教育場面で動機づけを高めることの意味とその方法について考えていきます。

3 学習方法と評価　指導：岸 学（東京学芸大学教授）

学習指導の活動をとらえるためには知識の獲得過程、学習方法、指導方法、評価方法の4つの視点からの理解が肝要です。知識の獲得過程では学習によりどのような知識・技能・態度などが獲得されるか、学習方法では学習者の視点に立った自己学習について、指導方法では指導者の視点に立った教授法と授業の実施方法について、評価方法では学習効果が上がる学習指導と評価活動について具体例を見ながら紹介します。

4 学級の中の学習不適応　指導：桑田良子（植草学園大学教授）

学習活動の諸側面で気になる、学習活動を円滑に進めることに困難をきたす、今後の学習に支障をきたすことが予想される生徒などを「学習不適応」生徒としてとらえ、その対応や関わり方について事例をあげて解説します。発達障害については、障害特性と認知特性を理解した対応の必要性を示します。また、「学習不適応」生徒への心理面の支援、進路問題への支援、学校体制の取り組みにも言及します。

5 自分探し　指導：笠井孝久（千葉大学准教授）

中・高校生の時期は、親や社会から与えられた行動基準ではなく、自分なりの行動基準で考え行動し、社会との関係を築こうとします。さらに、身心や友人関係の変化、進路など、様々な変化や課題への対応が求められます。「自分づくり」・「自分探し」をキーワードに、事例を通して、青年期の自立へ向かう心性とそれらを理解する視点、発達を支援する教育的関わりについて解説します。

6 中・高校生の人格と情緒　指導：濱口佳和（筑波大学教授）

青年期には、新しい自己を求める旅に出、アイデンティティの探求を縦軸に、パーソナリティ形成も進んで行きます。人格の概念や主なパーソナリティ理論を紹介し、自己愛、主張性、攻撃性など、青年期のパーソナリティ形成にまつわるトピックを紹介します。孤独感や自己嫌悪感など、情緒的に不安定になりやすい時期でもあります。特に対人恐怖心性と抑うつ傾向を取り上げ青年期の感情面の問題についても解説します。

7 青年期の交友関係　指導：榎本淳子（東洋大学准教授）

青年期の友人関係は、親からの自立を支え、自己を獲得する過程で重要な役割を果たしています。中学生と高校生と大学生とでは、友人との関係の持ち方が異なります。その実際はどのようなものなのでしょうか。

青年期の友人関係の重要性とその機能と発達的変化を紹介しつつ、近年の友人関係の特徴についても再考し、教員は交友関係にどう関与すべきかを考えていきます。

8 教育とメディアの諸問題　指導：中澤 潤（千葉大学教授）

マンガ、インターネット、携帯電話、テレビ等は、若者に大きな影響を与えています。マンガを読むリテラシーについて解説し、また、正誤多様な情報が混合して提示されるテレビやインターネット等のメディアから、適切な情報を読み取るメディアリテラシーが重要なスキルであることを提示、情報を鵜呑みにするのではなく、批判的に検討することの重要性にも言及し、青年にとってのメディアとの適切な関係を考えます。

9 不適応と問題行動　指導：田中奈緒子（昭和女子大学准教授）

青年期の若者は身心、対人関係、社会的役割など変化の中で、両親や教師など権威者との葛藤、自己評価の揺らぎなど、様々な問題を抱えます。そして、その問題は、不適応や問題行動として顕在化することがあります。非行と不登校を取り上げ、その実態を概説し、彼らの心理状況について解説します。不適応と問題行動に関する理解と支援についても考え、合わせて具体的な支援がなされている現場での生の声も紹介します。

10 若者の性行動　指導：福富 護（東京学芸大学名誉教授）

第二次性徴の発現に象徴される性的成熟は、青年期の始まりを示す身体的な変化であり、青年の心理や行動に多大の影響を及ぼします。しかし、教育の場では、青年の性意識や性行動に対して抑圧的な姿勢が根強く、十分な対応がなされていないのが現状です。教師として対応をするためには、性を考える視点を自ら確立させる必要があります。

現代社会の中で性意識や性行動を考えるための枠組みを、価値観との関連を含めて解説します。

株式会社 サン・エデュケーショナル　〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂1-22-8 朝日屋ビル9F
TEL.03(5428)5675 FAX.03(5428)5674 URL http://www.sun-edu.co.jp